
あらゆる禁忌の理

アナザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あらゆる禁忌の理

【Nコード】

N4753G

【作者名】

アナザー

【あらすじ】

これはとある近未来のお話し。日本が独自に開発した遺伝子操作学により、日本中には禁忌の力、『能力者』が溢れていた。遺伝子操作により生み出された『能力者』はいつしか人々に疑念を抱かせた。その疑念から、日本ばかりか世界中から『能力者』達は閉め出されていた。そう、彼らは幽閉されたのだ。ただし自由のある幽閉日本に作られた世界中の『能力者』が集う街、『エリシオン』、『能力者』達は何不自由無く、暮らしていた。そして、一週間前に『エリシオン』に引越して来た少年、神坂雄一。彼の出現から、新たな

理が動き出す
呼んで下さい笑
！！（あらゆる禁忌の『理』と書いてロジックと

とある近未来の日本

日本史上最高の学者と呼ばれた通称“イレブントラスト”により開発された“遺伝子操作学”。

精子と掛け合わせ受精した卵子に、“紋章”書き込む。

“紋章”とは、様々なデータを加えたメモリーカードのような物だ。受精した卵の遺伝子に“紋章”を書き込む事で、人が尋常では引き起こせない力を呼び覚ます。

それは成長と共に力を増し、やがて『能力』に目覚める。

簡単に言えば人工的な超能力者である。

ある者は風を呼び、ある者は炎を操り、またある者は獣の力を得る。各自が違った力を持ち、世界に役立てる。

そのはずだった。

だが、いつしか人々は能力者達を恐れるようになったのだ。いつか牙を剥くかもしれない。という疑念が過ぎつたのだ。

人々は能力者を隔離した。

ある程度の自由。

ある程度の束縛による街に、能力者達は幽閉された。

その街こそ、『神々の楽園』と呼ばれる、“エリシオン”である。能力者達は、いつしかこの街で暮らすのが当たり前になっていた。

そんな日常のお話し。

6月24日

その目覚めた天井は、まだ見慣れぬ天井だった。ベッドに横たわる彼、神坂 雄一は寝起き早々にため息をついた。神坂がこの街に引越して来たのは一週間前になる。

彼も一週間前までは、普通の高校1年生としてそれなりの日常を楽しんでいた。

普通に生活し、普通に学校に通う希望に満ちた高校1年生。

だが、彼は周りの人間とは“違った”。

雰囲気はどこにでも居るような普通の高校生。

だが、彼には異能が宿っていた。

彼を周りが拒絶したのだ。

彼の頭に嫌な思い出が蘇る。

神坂は頭に過ぎった悪夢を忘れるために頭をブンブンと振る。

そして、ゆっくり立ち上がり、大きくのびをした。

神坂はとにかく一週間前にこの街に引越して来たのだ。

やはりというかコチラでも学校に通う。

もはや学生の規定事項である。

神坂は適当に朝食をすませて一人暮らしの部屋を出た。

「あら？おはよう、神坂君。」

部屋を出てすぐに声を掛けられる。

神坂が住むアパートの部屋の隣の人間だ。

ヤマシタ
アカネ
山下 紅音

神坂の通う学校のクラスメートである。

活発そうな強気の顔立ちに意思の強い大きめな瞳。淡い茶髪の髪は彼女の肩で止まっている。

「よう、山さん」

彼、神坂 雄一は彼女の名前をめんどろだからと山さんと呼んでいるのだ。

「あんだねえ、いい加減その呼び方止めなさいよ」

紅音が迷惑そうに言う。

だが、神坂にはまったく謝る気すらなく先に歩き出す。

「面倒だから良いじゃねえか」

気ままな人である。

紅音と二人仲良く肩を並べて彼らが通う、異端都市“エリシオン”の高等学校、“天海高校”に向かう。彼らが通う高等学校は異端都市だけあって普通の学校とは習う科目も内容も異端である。

もちろん生徒から先生まで全てが能力者である。彼らの必修教科として能力を暴走させないための能力指導、能力の起こしうる全ての事象を研究する能力研究や、能力の生まれる理論、能力理論などやはり異端であるのだ。

最初は神坂もちんぷんかんぷんであったが、やはりまだまだ謎な部分もあるために素直に授業を聞けば理解は出来る。

しかし、あれをテストにする意味があるのか分からない。と神坂は来週に迫るテストに本日2回目のため息をついた。

「朝からため息つかないでよ。私までアンタの貧相が移るわ。」

「人をタチの悪い病気みたいに言うなっつうの！！大体なんでお前はさも当然のように俺の隣を歩いてんだよ！？」

普通に周りから見ればこれはやはりどこからどう見ても恋人同士にしか見えまい。

「アンタねえ、アンタが陰気な面してるから一緒に登校してあげてるんじゃない。少しは感謝しなさいよ。」

そう当然のように言い張る紅音に神坂は思う。

（コイツは何とも思っていないのか…？いや、それともただの天然なのか？）

神坂はまだまだ謎の深いルームメイトに頭を抱えた。

バカな会話を何度も繰り返す内に、二人は彼らが通う天海高校に辿り着いていた。

二人仲良く校門をくぐる。

神坂は思う。

この街はいわば、扱いつらい者達を集めた閉鎖都市である。

しかし、このように高校を始め、ほとんど自由に能力者達が暮らし、子を生み、障害を終えている。

(こんなに自由なものなのか?)

始めて街に足を踏み入れた日にはその光景にあまりにも驚愕させられたものだ。

あまりにも自分が想像していた街と雰囲気違ったからである。

神坂が想像していた街とは、暗黒のように光りが毎日注さず、極悪人に溢れ、犯罪が絶えない悪夢の世界。

これが想像力豊かな少年、神坂が描いたエリシオンという街である。

(つが、何で日本に英語名の都市を作るといのが理解しかねる。)

と神坂は一人思う。

「よお、雄一！」

元気よく雄一に話し掛けて来たのは西川兼他である。

なにぶんありふれた名前のため、名前を覚えるのも簡単であった。

しかも、雄一の隣の席のため雄一には紅音の次に仲良くなった友達である。

キンコンカーンコーン

独特な鐘の音が黒板の上に設置されているスピーカーから流れてくる。

HRの時間だ。

ガラガラと扉が開く、同時にそれまで閑散としていた教室の生徒達が席に着く。

(今日ものんちゃんの格好エロいな)

と教室内に入って来た神坂達1年F組の担任、益山 智子(27)に、エロ目を使う神坂。

そう、彼らの担任益山の格好は、誰が見ても目を見開き凝視してしまふものだった。

容姿端麗で引き締まったヒップ、大きく開いた胸元から見える豊満な胸に、短いピンクのスカートに白いシャツ、ピンクぶち眼鏡はどこからどう見ても危ない教師である。

こんな教師が許されるのか？

などと考える方が無駄である。

ここは異端都市なのだ。

「はあい、皆おはよう。あれ？寺本が来てないねえ、まあいいやアイツ不良だし」

(いいのかよ!?!?てかそんな自由でいいのか!?!?)

ちなみに寺本というクラスメートも雄一が仲良くなった一人である。
「じゃあ簡単な報告をしまあす。」

益山が教師とは思えないほど軽い声で最近の報告を始めた。

この街では街の様子を知るためほぼ毎日全ての学校で街の近況を報告しているのだ。

「昨日南部で交通事故が発生、幸い怪我人はその場にいた能力者のおかげでゼロ。あんた達も気をつけなさい。」
そんな報告がしばらく続き、4つほど報告したあたりで益山が声色を変えて話した。

「…実は最近、エリシオン各地で通り魔が多発してます。この通り魔による被害は死傷者も出ており、オラクル（“聖騎士”）が全力で犯人逮捕に」

益山の話が続く。

オラクルとは、エリシオンの警察である。

エリシオンの犯罪等の事件は凶悪なため警察では対処出来ない。そのため能力を持った者達を集めた警備組織が必要だったのだ。それがオラクルである。

神坂はそんな益山の話しなどあまり耳に入っていなかった。

悩みの奥から湧き出る眠気が神坂を襲っていたのだ。

（ね…眠い……）

もちろん神坂は最初から戦うつもりなどなく、眠気に身を委ねた。

目を開ける。

「よつやく起きた…」

と、目の前に呆れ顔の紅音が居た。

「……………今、何時……？」

恐る恐る尋ねてみる。

何故だが嫌になるほど快眠した気分なのだが。

「今はもう3時間目。」

何ともう3時間近く寝ていたらしい。

「やっちまった……………」

テスト前だと言うのに爆睡してしまった。

ただでさえちんぷんかんぷんな部分もあるというのに。

「アンタがぐっすり寝てるから担当の先生達、めちゃくちゃ呆れてたわよ？」

「それは悪い事したな」

と紅音に頭を下げる。

「私に謝んなっ！」

「ぴぎゃ!?!」

紅音の水平チョップが神坂の側頭部を刺激した。

恐ろしい破壊力である。

「っーかさあ」

神坂が悶絶するなか、二人のやり取りを見ていた西川が話しかけてきた。

「雄一の“理”（ロジック）は何なんだ？」

「“理”（ロジック）って何だっけ？」

神坂はそう言っつて紅音を見遣る。

「教えたでしょ？私達が操る能力の総称よ。」

エリシオン内で“理”と呼ばれているのが能力者達の操る能力の総称である。

能力の生みの親“イノセントトラスト”が“理の力”と呼んだ事が始まりらしい。

そのため彼らは一同に能力の事を“理”、ロジックと呼んでいるのだ。

「そうだったなあ……」

神坂が思い出したように呟いた。

「私の“理”が炎、西川の“理”は、加速だったわね？」

西川が頷く。

「で、あなたの“理”は？」

紅音が神坂に詰め寄る。

雄一はそこで冷や汗をかいた。

なにぶん自分の“理”をあまり明かしたくないのだ。

「ま、まあアレだ、謎の転校生って事で見逃しちゃくれなにかい……？」

どこか言葉が可笑しい神坂が苦しみながら言った。

「アンタねえ……ま、いいわ。別にたいしたことない“理”だったら可哀相だし。」

紅音にしては珍しく潔く引き下った。

その後すぐに次の授業の先生が入室して来て西川も渋々引き下がった。

その日はそれ以外あまり対した出来事もなく全ての授業を終えた。

夕日が校舎を照らす。

この学校に来て神坂は一週間になる。

しかし、やはり慣れない環境であり、慣れない一人暮らし。

夕日が沈むと、何故だが胸が締め付けられる。

いつも平凡な日常で、いつも優しい家族。

それを急に取り除かれるのだ。

『異質』という烙印を押されただけで。

まだまだ幼い神坂は、柄にも無くホームシックになっていたのだ。

しかし、悲しむ中で、この街を楽しんでいる自分が居るのだ。ワクワクするのだ。

お伽話のような世界にほうり込まれた自分が、嬉しいのだ。

「なあにポケットとしてんの！」

考え込む神坂の背中にズシリと重い衝撃が走る。

「いつてえ!!??」

不意を突かれた神坂は情けなく悲鳴を上げてしまった。

怒りの眼差しで振り返る。

そこにはやはり、というか当たり前というか神坂の背後でニヤニヤしている丘々崎 紅音がいた。

「何しやがる!?!」

「あんたがボケーっとしてるから慈愛に満ちた私がアンタに声を掛けてあげたんじゃない。感謝してほしいぐらいだよ」

そう腕を組み、強気に言う紅音を神坂は恨めしげに睨む。

しかし、それも面倒なので神坂は一つため息をついてそっぽを向いた。

「別にそんなおせっかい入り

「淋しいんだあ」

神坂の言葉を遮り紅音が馬鹿にするような声色で告げた。

「バ、バカ言ってんじゃないやねえ!!俺はだな!俺はだな……」

神坂は弁明しようと思死に言葉を紡ぎだそうとする。

しかし、神坂にはそれ以上の言葉を紡ぎだせなかった。

俺は淋しい。

当たっているのではないか？

優しい家族から突き放され、一人淋しい夜を過ごす。

言葉を紡ぎだせないまま強く握った拳が震えるのを紅音は確認していた。

「アンタにも淋しいって感情があるのね」

と紅音は神坂から視線を夕日に移した。

「あのなあ、俺だつて人間…つてか会つて一週間しか経ってないお前に言われたかねえよ!!」

と神坂は夕日に照らされる紅音に言った。

しかし紅音は神坂の期待した反応とはまったく違い、哀愁たっぷりとした顔で

「一週間、ねえ…」と呟いた。

神坂はその呟きをそれとなく聞いていた。

聞いていたのだが、その呟きが妙に違和感があったのだ。

紅音はパツと振り返り神坂の肩をバンバン叩いた。

「なあんて、私らしくないわね!!あんたもらしくない事言っでないでしゃきつとしなさい!しゃきつと!」

そう言いながら神坂の肩をバンバン叩く。

先程の物憂げな表情はどこへやら、夕日にも負けなくらい眩しい笑顔で神坂の肩を叩く。

「痛って！バカ！大体だな！こういう場合はそつと抱きしめて寂しがる俺を安らげるのがベタだろ！？」

「……。アンタ、この私にそんな純愛キャラを期待してんの？」

紅音の髪が一瞬パチパチと火花を上げた。

「じ、冗談冗談！！」

ブンブンと首と手を振り降参のポーズ。

こんな近距離で火なんか出されたら大火傷は免れないだろう。

以前に紅音から『私の炎はこの都市でもNo.1の部類に入るのよ』と脅された事があった。

最初は本当か疑わしかったのだが、2日前にナンパされている紅音がチンピラの“理”をぶち抜いて真っ黒焦げにしたのを目にしていた。

そのため少しばかり彼女の炎にはトラウマがあるのだ。

「あ、そういえば駅前に美味しいケーキ屋さんがあるのよ！行くわよ！」

目を輝かせて神坂に尋ねる紅音。

彼女は筋金入りのスイート好きだ。

転校初日に彼女にケーキバイキングに連れて行かされた時に自分だけ腹を壊したのはあまり良い思い出ではない。

「またかよ！？」

「何？行かないの？」

顔は笑っているが、紅音の周りの温度が急激に上がったのが肌で感じ取れた。

（こ、殺される…！！）

もはや自分に選択肢などなく、神坂は無理矢理頷くしかなかった。

「う、美味しい…！！」

神坂は目の前に出されたティラミスを一口食べて呟いた。

「でしょう！？このケーキすっごく美味しいって有名なのよお！」
美味しそうにショートケーキを頬張りながら紅音は幸せそうに言った。

「確かに美味しい…美味しんだが」

そう言っつて神坂は辺りを見渡して叫んだ。

「なんで周りがカップルばっかなんだよお…！！！！」

神坂が入って来た瞬間から気付いてはいたが、この店の店内はカップルばかりが座っていた。

「なんでって、この店はエリシオンでも有名なデートスポットなんだから」

さも当然のように紅音は神坂に言った。

「てめっ！なんでそれをもっと早く言わねえんだよ！？」

神坂が怒鳴るも紅音は一人黙々とケーキを食べている。やがて口を開き

「アンタ浮いてるわよ。」

そう言っつてフォークで周りを指す。

周りのカップルがコチラをジト目で見ている。

カップル喫茶で例え紅音がガールフレンドではないとしても、周りから見ればやはりカップルにしか見えないわけで、しかもそのカップルが怒鳴っていたとすれば、喧嘩をしているとしか思われないわけ。

「っ……」

ヒソヒソと最低という言葉が神坂に届いたあたりで神坂は悔しげに着席した。

悔し泣きしそうになるが、何とか堪えた。

「ホント、あんたっつてKY、空気“読まない”バカよねえ」

と紅音が鼻笑い付きでバカにした。

「てめっ……カップルばっかだから俺を誘拐して連れて来やがりましたね？」

「当たり前じゃない」

最低な女だ。

と神坂は歎く。

「つか！俺のティラミスがねえ！」

「ごちそうさまでした」

そう言っつてウインク混じりで手を合わせる神坂。

「最低だ……」

とため息混じりに神坂は呟いた。

夕日も完全に落ち、神坂と紅音はネオンまばゆい繁華街から離れ、真つ暗に静まり返る路上を歩いていく。

「はあ食べた食べたあ！」と腹をさすりながら満足そうに話す紅音。そんな彼女とは裏腹に神坂はとぼとぼと落ち込んだ足取りで歩く。

「結局、ティラミスを半分も食べられないし…割り勘させられるし…最低だあ。」

神坂は呟いた。

「うぬ？アンタ何凹んでのよ？」

「腹が減ったんだよ！察しろよ！」

神坂は怒鳴るも腹が減ってあまり力が出ない。

昼にカレーパンだけしか食べなかったのが影響したらしい。

そのカレーパンも紅音に少しかじられたのだ。

ふと神坂は先を歩く紅音を見て思う。

転校して来て以来、彼女がいつも一瞬に居る気がする。

まるで寂しがる自分を元気づけるかのように。

（なんであんなに優しく？してくれるんだ…？）

と疑問に思う。

「あ、そういやアンタ今日3時間目まで寝てたわね。もう少してテストなのに大丈夫？」

「うっ！それを言われると…」

あまり芳しくないのは禁句である。

大体普通とは習う事が少し異質なのだ。

分かりやすいとは言え理解するのは骨が折れる。

「なんだったら私が今から勉強見て上げようかあ？」

「見てあげようかって、お前勉強出来るの？」

お世辞にも賢そうには見えない。

「アンタ知らなかったの？私中学の時は3年間ずっと学年1位だったよ。」

「……………さらっと自慢しやがったな……………」

彼女、山下 紅音は有名な私立中学を学年1位で卒業した神坂達の学年でも一目置かれてる存在であるのだ。

「ま、まあお前になら教えてもらってもいいかな。」

「頼み方間違ってるでしょ？」

紅音は笑いながら言った。

神坂に先程の疑問が再び頭に過ぎる。

「あのさ、紅音…何で」

そこまで言った瞬間

「キヤアアアア!!!!!!」

二人の耳に凄まじいまでの断末魔が届いた。

二人がハツとして声の方を見遣る。

「近い!!」

紅音が叫ぶ。

同時に走り出す。

「ちよっ!!?おい!!」

神坂の制止すら無視して紅音は走り去る。

叫びが聞こえたという事は何かがあったという事。

それは『危険』だという事。

「くそっ!!あのバカ!!」

紅音が危ない。

神坂は考えるより先に走り出していた。

彼女、山下 紅音はその強い正義感からその叫びの元へと無我夢中で向かっていた。

叫び声から女性と断定し、その女性を守りたいという顔も知らない女性のために走っていた。

叫び声からしか場所を割り出せない紅音は大体の勘で走っていた。

「っ！！！」

突き当たりの角を曲がったところで紅音は目を見開いた。

黒いコートを着た背丈の高い何か。手には『何か』を掴んでいる。

天高く宵闇に掲げた『何か』を黒いコートの何かはまるで興味を無くしたかのように投げ捨てた。

ドサツと何かが冷たい液体を撒き散らして紅音の前に横たわる。

暗いため、それが何かはよく分からない。

自分の顔に何かが付着する。ソレをゆっくり手で拭う。

生温かいソレは、紅音にあるモノを連想させた。

「っツツ……………」

連想させたソレと、目の前に横たわるソレすらも連想させた。

吐き気が紅音を襲う。

しかし、彼女はソレすら振り払い、キツと黒いコートの何かを睨む。戦わなければならない。

黒いコートの何かがコチラを向いて手をかざす。

（来る……………！！）

紅音が思った瞬間、黒いコートの何かは一瞬で距離を詰めていた。

コートの何か、いや、がたいから確実に男性だろう。

その男が手を振り下ろす。

「っ!?!」

紅音は反射的に振り下ろされた手をかわす。振り下ろされた手はかわしたと思っていた紅音のブレザーを切り裂いた。

「へえ〜。アンタ学年1位でエリシオンNo.1の炎使いの私の服を破るなんてアンタやるじゃない。」

強気に言う紅音を尻目に男は何も言わずただ荒い鼻息しか聞こえない。

「無視なんて上等じゃない。」

紅音の逆鱗に触れた。

紅音が男から距離を取って手の平をかざす。

彼女の周りの温度が一気に上がる。

アスファルトの地面が焦げ、焼ける。

彼女の周りだけが太陽のように明るくなる。

彼女の周りに炎が舞い上がる。これはショー等ではない。むしろお

遊びのようなちゃちな炎ですらない。

彼女は自らの体温や、空気中の酸素を燃やし、その炎を正確に操る。

その形状すら彼女にとってはたやすく変えられるのだ。

「死ねやああ!!!!!!!!!」

汚い言葉を叫びながら炎を打ち出す。

“地獄の炎”と呼称される彼女の炎は、エリシオンのトップに立つ

炎使いである。その彼女が打ち出した炎を、男はやすやすとかわす。

しかし、今のはフェイクに過ぎなかった。

彼女にとっては今のは小手調べだ。

彼女の周りに浮かぶ炎を球にして打ち出す。

次の一発目よりも威力は弱い、手数で打ち出す炎球だ。

その炎球を手に纏い、ボールのように投げ付ける。

一発目が外れ、すぐさま二発、三発目を打ち出す。

「っ……！！！」

男が連撃にバランスを崩した。

「まだまだあ！！！」

紅音がささず炎を打ち出す。

打ち出された炎は寸分違わずゴートの男に

当たらなかった。

いや、正確には何かに掻き消されたのだ。

「クツクツクク……」

呆気を取られる紅音を尻目に男は愉快げに笑う。

「愉快な女だ。私に本気を出させるとはな。」

低い男の声。

「餌は餌らしく、私に食べられればよい。」

「餌……！？」

紅音が目を見開く。

餌と言ったのか。

この男は。

炎に照らされ、先程男に投げ捨てられた何かが見える。

「……………っ！！！」

紅音は息を飲んだ。

自分と同じブレザー。

血まみれで、傷だらけで、でも顔ははっきりしていた。

「美優……………！？」

彼女のクラスメイトであり、仲の良い友達が、目を見開き、血を吐いて倒れていた。

一瞬で血の気が失せる。
首からの出血が激しい。
死んでいる。

紅音にはそれが分かってしまった。

「紅音！！」

誰かの叫びが、彼女を現実に戻した。
しかし、現実に戻った彼女の目の前に男が居た。

「っ……………！！！」

男の口からは鋭い牙が見えていた。

男の腕が紅音の腹に深く突き刺さる。

「がっ……………！！！」

紅音の声にならない言葉が漏れる。

男の口が大きく開かれる。

(あ……………私…死ぬんだ……………)

紅音が遠ざかる意識の中で絶望する。

終わった。

そう思った。

だが、

「があああああ！！！！！！」

閉じていた目を開く。

自分の腹に突き刺さっていた手が消えている。

目の前に迫っていた男すらも。

状況が理解出来ない紅音に、遠くから弓を片手に叫び続ける神坂が見えた。

「遅いのよ……………バカ……………」

それが彼女の最後の言葉だった。

神坂は一人、ただ祈っていた。集中治療室で寝ている紅音が目を覚ます事を。

あの時、紅音はおびただしい量の血を流していた。もう一人の女の子はすでに息絶えていた。

神坂は必死の思いで紅音を担ぎ、病院へと駆け込んだのだ。

エリシオンの医療レベルは世界でもトップクラスである。特に今居るこの病院は、エリションでも一番の腕利きである医師が居る。

「彼女なら大丈夫よ。」

うなだれる神坂に優しい声が掛けられた。

神坂がゆっくり顔を上げる。

「…あなたは？」

白衣を着ているため医者なのだろう。

「東条 咲枝トウジョウ サキエつて言います。」

黒ぶちの眼鏡を掛け、長い黒髪をクシで留めている。容姿端麗。美人である。

「東条さんも、理を？」

当たり前のように東条が頷いた。

「私の理は、物理治療。メスとか手術道具に治癒能力を与える能力よ。」

つまり、彼女の理はアニメキャラクターのシールを素晴らしい治癒能力を備えた絆創膏にする事も出来る。また、手術をしながら治癒させる事すら出来るのだ。

「私が居る限り救って見せるわ」

そう自信げに彼女は言う。

「…そうですか、良かった。」

神坂は紅音が手術を受けている間にオラクルから執拗に事情聴取を受けていたのだ。人が死んでいるのだ。当たり前といえば当たり前

だ。

しかし、それで分かった事もある。一連の被害者は、全て女性である事。また、首に噛み傷があり、全身の血が抜かれている事。そこから考えられる事は一つ。

「吸血鬼……」

神坂は強く拳を握り締めた。まさか吸血鬼が存在するとは。

しかし、ここは能力者が集う街だ。恐らく、能力は身体強化だ。身体強化にはそれぞれ違う能力が備わる。

西川が使う加速も身体強化に分類される。身体強化は、人間の限界を越える事を許される。鋼の肉体や、岩をも砕く一撃を得る事も。

だが、その中でも吸血鬼は異質の中の異質である。吸血鬼のような特異な身体強化は禁忌とされる理である。

禁忌の理。人に害をなす恐れのある理を指す。

そんな理を持った者は、オラクルから保護観察がかけられるのだが、どうやらあの吸血鬼はノーマークだったらしい。

紅音が目を覚ますと、そこは暗い病室だった。

麻酔が効いているらしく、身体があまり動かない。

「よう。目、覚ましたか？」

横から声がした。

横に首を向ける。神坂だ。

心配そうに顔を歪めている。

「私…負けたんだ…。」

彼女の頭がようやく覚醒し、苦い敗北感と、友を失った喪失感が紅音を襲う。

「私……守れなかった。」

神坂は答えない。

「私、何も出来なかった……」

啜り泣く紅音を見て、神坂は何も言えなかった。力がある。

力があるのに使わない臆病者を知っている神坂には、彼女に掛ける言葉を紡ぎ出せなかったのだ。

「私は……弱いのかな……？」

紅音の頬に輝く雫が零れた。

臆病者である自分に、神坂は失望していた。

失望して、諦めていた。

諦めていたのだが、紅音の涙を、神坂は見たくないとでも思った。

「……今は、寝ろよ」

神坂は優しく紅音の頭を撫でた。

次の日。

神坂は学校どころではなかった。学校では亡くなった同級生の葬儀を行うため、会場へ向かっていた。

啜り泣く声があちこちから聞こえる。昨日まで生きていたクラスメイトがもういない。二度と会えないのだ。世界中を探しても見つけられない。

失った命を戻す事は出来ないのだ。

神坂はその光景を見るに見兼ねて飛び出した。

許せない。と思う。

何故人の命を奪えるのだろうか？

何故あんなにたやすく人を殺せるのだろうか？

何故、自分の周りの人が傷つくのを見なければならぬのだろうか？

「雄……」

背後から声が掛けられた。西川だ。

「紅音は？」

西川が尋ねる。

「昨日怪我してな、入院中だ。」

神坂は咳くように言った。

「そっか……。」

西川は短く咳き、続ける。

「あの子さ、紅音の友達だったんだよ。中学からの仲でな。アイツつてさ、いつもあんな感じじゃん？だから……友達少ないんだよな。」

西川が苦笑混じりに言った。

それを聞いて神坂の頭に嫌な光景が浮かんだ。

紅音が泣いている。

友達を失い、傷つき、泣いている。

神坂の中に苦い思いが溢れ出る。

毎日毎日笑っている彼女の泣いている姿。

想像するだけで怒りが込み上げる。

何故彼女が泣く必要がある。

何故彼女が泣かなければならないんだ？

アイツは、どうするんだろう？

神坂の脳裏にそんな思いが過ぎる。

神坂が知る紅音は強気で、自己中心的で、我が儘で、自信過剰で、優しい。

そんな紅音が、友達を失ったとしたら……。

「……………！！！」

神坂は気付いてしまった。あの猪突猛進な紅音が何をするか。考え

ただけで分かっちゃった。

「紅音……!!」

神坂は西川を置いて走り出そうとした。

しかし、立ち止まり。

「西川!!」

「な、なんだよ?いきなり……」

凄惨な剣幕で怒鳴る神坂に西川がたじろぐ。

「お前の“足”で“美作病院”まで何分だ!？」

「何分ってなんで?」

「いいから!!」

なおも怒鳴る神坂に西川は怖ず怖ずと答える。

「2分もあれば」

「よし!!行くぜ!!」

「って何しやがる!？」

神坂はいきなり西川の背中に抱き着いた。

いわゆるおんぶである。

「“美作病院”までダッシュだ!!」

「な、何か知らねえけど、しっかり掴まってるよ!!」

西川の足が赤く光る。

タンツと地面を踏み出した。

その瞬間、背中の神坂は猛烈な加速Gに襲われた。

「ぐは!吐く……!!」

「てめっ!俺の背中で酔ってんじゃねえ!!!!」

「もう、歩けない……」

全速力で駆け抜けたため足が限界を迎えた西川を放置して神坂は病院に突入した。

診察に来た患者やナースが走っているのを注意していたが気にしない。

一目散に昨日まで紅音が居たはずの病室を目指し、ノックも無しに開け放つ。

「紅音!!」

やはり、というか予想通りというか、彼女、紅音は“そこに居なかった。”

彼女が寝ているはずのベッドはぐちゃぐちゃで、起き上がり何処かへ行ったのが見て取れる。

そしてここは1階だ。

窓が開け放されているのを見て神坂は毒づいた。

「あいつ…やつぱり…」

彼女の性格上こうなる事は充分予測出来たはず。

それなのに自分は何をしていた。彼女を放置し、側にも居てやれなかった。

『私は…守れなかった…。』

彼女の悲痛な叫びを聞いたじゃないか。

彼女が、普段滅多に泣き言を言わない彼女が涙を流し、呟いたのだ。なのに自分は気の効いた言葉すら掛けてやれなかった。なのに何故、何故まだ自分は震えているんだ？

何故、力があるのに振るうのを恐れているんだ？

それは彼がこの街に来る前に起きた事が発端であった。だから彼は戦えない。

力を使えば誰かが苦しむから。

なのに、何故、自分はこのんなにもどかしいのだろうか？

「ビビってる場合か…？神坂……」

震えた声。

自分のものだった。

こうしてる今も、紅音はまだ完治していない傷を引きずり、血眼になって吸血鬼を探しているのだ。

紅音に勝ち目はない。

例え彼女がエリシオンNo.1の炎使いだろうが、重傷の彼女は歩く事すらままならないはず。

なのに彼女は戦おうとしている。

失った友のため。

自分の命を削ってまで。

「なのに…俺は…。」

自分を恐れ、周りが傷つくのを恐れ、何をしているんだろう？

戦えないわけじゃない。

戦わないだけ。

そんなんでいいのか？

彼女を失ってもいいのか？

彼女の笑う顔、怒る顔、苦笑する顔や前髪を弾く癖。そんなものを

失っていいのか？

「いいわけねえだろ……。」

低く呟く。

また自分の声だ。

握りしめた拳により力が入る。

（ここで逃げたら、俺は俺じゃなくなる！）

大体、神坂には見捨てる事など、出来はしなかった。

気が付けば病室を飛び出し、走り出していた。

空の色は、優しい青空から、闇夜の海に変わっていた。

今宵は満月。丸い月が、まるで肩を押しているような気がした。

彼女、山下 紅音はこの時が来るのを待っていた。

彼女の周りにパチパチと火花が散る。

吸血鬼は夜にしか現れない。それは一連の通り魔が夜にしか起きていない事からも伺える。

大体吸血鬼といえは夜だ。という勘もあった。

そして吸血鬼は一人の時を狙う。

だから彼女は、こうして今は使われない廃工場でわざと血を垂らし、理で血を蒸発させていた。

蒸発した血は風に乗る、吸血鬼に届くはず。

彼女もバカだと思う。

これから自分は勝ち目の薄い戦いを行うのだ。

今の自分の怪我で理を使えば、傷口は瞬く間に広がるだろう。

だが、それでもアイツを刺し違える事は出来る。

例え神坂がそれを望まないと分かっている。紅音にはこれしかなかった。

それほどまでに彼女にとって大事な友達だったのだ。死ぬかもしれない。いや、間違いなく自分は死ぬ。

彼女の足が自然と震えた。

怖い。

口には出さないが、彼女からはそれが伺えた。

しかし、亡くなった友のため、彼女は自らを奮い立たせる。

いつもムツとして近寄りがたい紅音に彼女は優しい笑顔で話し掛けてくれた。

自分が学年一位という成績を取った事を、誰より喜んでくれた。

初めて女友達とシヨップングに出掛けた。プリクラもいっぱい撮って、携帯に張り付けた。写真だってたくさんある。料理だって教え

てくれた。

「なんで、……………」

…あの子が死ななきゃならないのかな、と。紅音は涙で頬を濡らしながら呟いた。

生きてもつと遊びたかっただろうに。

私ももつと一緒に居たかった。

転校して来た神坂を見て

「カッコイイ」と呟いた彼女。彼女なら神坂と一緒にいる事も出来たかもしれない。

もし、昨日彼女と一緒に帰宅していれば、救えたかもしれない。

だから、自分が責任を取るしかなかった。

こうやって自分を追い詰めて、打ちのめして、奮い立たせなければ、自分で自分を保っていられなかったのだ。

彼女はポケットから携帯を取り出し、待ち受けを開く。

そこには楽しげに映る二人の美少女。

それを見て、紅音は笑った。普通に笑っていたが、どこか自嘲気味でもあった。

家族にメールでも送ろうか。

そんな考えが浮かんだが、次に神坂の顔が浮かんだ。

「なんでアイツが…。」

自分の頭に浮かぶんだろう。と疑問に思う。

謎の転校生、神坂 雄一。彼に近づいたのは亡くなった彼女のためだ。

自分とは違い、内気な彼女のため、彼を知ってやろうと思っていたのだ。

だからデートスポットに誘い、シュミレートまでしてみたのだが。

「それも無駄だったね。ゴメンね……………」

そこで紅音は言葉を区切り

「でも、償いはするから。」

そう言っつて、頭上の天井を派手に破り落ちて来た吸血鬼を睨み付け

た。

「クツヒヒヒヒヒ」

勘に触る笑い声が紅音の耳に届く。

コイツが、コイツが友達を殺したのだと怒りが込み上げる。込み上げた怒りが傷口からの出血を早めたが気にしない。

「なあんだ。昨日の炎使いじゃないかあ、わざわざ食べられに来たのかい？」

鬱陶しく笑いながら吸血鬼が話す。

口元からは鋭い牙が怪しく飛び出している。

やはり吸血鬼で間違いはない。

「アンタ吸血鬼なんでしょ？」

「いかにも。」

吸血鬼は愉快げに頷く。

「じゃあ何？アンタに噛まれると私も吸血鬼になるわけ？」

そう尋ねると吸血鬼は愉快げに笑い出した。

「クツヒヒヒヒヒ！不正解だよ。私に噛まれても血を食べられるだけで、吸血鬼にはならないから安心したまえ。」

吸血鬼は自分が有利だと知っているから笑う。

「知っているかい？人間の生き血はね。熟された女より、処女の血の方が格別に美味いんだよ。」

味を思い出すように舌なめずりする。

「だから女子高生が好物ってワケ？」

挑戦の視線を吸血鬼に送る。

「そ。だから、君を食べたくてしょうがないんだよ。体の疼きが昨日から止まらないんだよっ！！」

それを合図に吸血鬼が地面を蹴って飛び込んで来た。

「……ッ！」

しかし、彼女は逃げない。真っ向から迫る吸血鬼を睨み、指で空に文字を描く。まるで指揮者のようにリズムを打ち、叫ぶ。

「燃えるおー！」

彼女の前方から放たれた巨大な火の渦が吸血鬼目掛けて飛び放つ。

ゴオ！と轟音を上げて放たれた火の渦を吸血鬼はサツとかわす。

そのまま地面を片足で蹴り、手をかざす。

あの腹を貫いた手だ。

彼女は咄嗟に身を引いた。

「ぐう……！！！」

身を引いたはずの彼女の肩が切り裂かれ、血が闇夜を舞う。

「クツヒヒヒヒ！！！」

吸血鬼は愉快そうに手に付着した紅音の血を舐め

「これは絶品だ。」と舌なめずりする。

紅音はというと、肩の傷口を押さえ、息を荒くするしかなかった。

腹の傷口もかなり痛む。

出血もしているため、戦闘に集中しづらい。

「まだ……まだ……！！！」

ゴウツ！と爆炎が彼女の床から上がり、そのまま天を迂回して吸血鬼に迫る。雪崩のような炎の威力に圧倒された吸血鬼がたまらず回避する。

「まだあー！！！」

空中に回避した吸血鬼に炎を足に纏った紅音の蹴りが直撃した。

「がッ！？！」

と悲鳴を上げて床に落ちる吸血鬼。

彼女も着地するが、着地した瞬間に踏ん張り、傷口から血が噴き出た。

尋常ではない痛みが彼女を襲う。

彼女は力無く地面に手を付いた。

それをお構いなく、吸血鬼はケロツと立ち上がり、不愉快に口元を

歪める。

「苦しいんじゃないのかい？」

まるで勝ち誇ったかのように吸血鬼が言う。

「うつるさいわね。アンタと話す口はないのよ。」

強気には言ったが、紅音の額には冷や汗がダラダラと溢れ出ている。痛みが邪魔をして、彼女の集中力を拡散させる。

どんな人間も、痛みに勝る事は出来ない。

アドレナリンが出て痛みを軽減するとよくスポーツで言われるが、あれはただ痛み続けたため、筋肉の神経が麻痺し、痛みを遮断したに過ぎないのだ。よく運動した後に怪我をした場所が急激に痛むのもそのためだ。

「くそっ……………」

目が霞む。力が入らない。今なら猿にすら負けるかもしれない。

やはり無理だったか。と自嘲的に笑いながら思う。こんな重傷で吸血鬼に立ち向かうなど、正気ではない。

「ゴメンね……………」

と誰にでも無く呟く。

彼女の視界いっぱいには吸血鬼が迫る。終わった。

そう思った。

だが、

ヒュンと彼女と吸血鬼の間を何かが駆け抜けた。

細い一撃だった。

それは一瞬だが、紅音にも見て取れた。

「弓矢……………」

何故弓矢が。と呟く前に吸血鬼に向けて弓矢が何発も放たれた。たまらず回避して、紅音から離れる吸血鬼。

紅音はハツとして弓矢を放った者を見た。

そこには、満月の光りをバツクに浴びて悠々と歩いて来る誰かが居た。

左手には弓を手にしている。しかし肝心の矢は持っていない。

霞む視界で、彼女はしっかりとその半袖の白い学生服の少年を確認した。

「待たせちまったな。紅音」

そこには紛れも無く、神坂 雄一が立っていた。

何故、ここに彼が居るのが紅音には分からなかった。

突然現れた神坂に、どう声をかければ良いかすら分からない。

「……触んなよ、吸血鬼」

神坂は、紅音と同じく唾然としている吸血鬼に向けて突き刺すように言った。

触れるだけで血管がブチ切れそうな怒りが言葉に含まれている。

「私の食事を何故、君のような凡人に邪魔されなきゃいけないのかな？」

自分の食事を邪魔されて、眉を嫌そうに歪める吸血鬼。

「君はアレかい？私が女性以外は殺さないとも思っているのかな？」

吸血鬼の言葉に、神坂の怒りが限界を迎える。

「黙って紅音から離れろって言うてんだよ、コウモリ野郎！！！」

凄惨な目付きと、雷のような神坂の怒声に、吸血鬼が言葉を詰まらせた。

まるで自分が初めてバカにされ、ショックをうけるかのよう。

「貴様　私が吸血鬼だと知っての狼藉か？」

吸血鬼を包む空気が変わる。怒り。まるで今にも神坂を殺さんとする怒り。

しかし、神坂はそれでも吸血鬼を睨み付ける。

「お前、私に食われる」

吸血鬼の口がいびつに歪む。

神坂は恐れずに、一步、さらに一步と歩を進める。

「雄、……………」

紅音は恐れていた。

神坂はこの街に転校して来たばかりの初心者。

神坂の理が何かは知らないが、相手はエリシオンNo.1の炎使い

ですらてこずる強敵だ。神坂で勝てるはずがない。

「さ、下がりなさい！アンタ、死にたいの！？」

紅音は微かな体力を振り絞って神坂に忠告する。

しかし、神坂は止まらない。

止まらずに、弱々しい紅音を見下ろして。

「お前こそ、死ぬ気かよ？」

神坂は悲しげに紅音に言った。

紅音は、まるで心を見透かされたかのように神坂を見た。

死にたくはない。

死にたいはずがない。

「お前を、死なせたりしねえから。」

神坂はそう紅音に言っつて、目の前の吸血鬼に再び強い目付きを送る。

「ハッ、私に逆らった事を土下座して命乞いするまで殴り倒してやる。」

吸血鬼はまるで負けるはずがないという目で、神坂を睨む。

吸血鬼が先に仕掛けた。

地面をゴツ！！と蹴り、神坂にその鋭い腕を突き出す。

しかし、神坂には少しも焦る様子はなく、手に持っていた弓を吸血鬼にかざす。

吸血鬼が

「ハッ」と鼻でバカにする。

“弓”で一体何が出来たのだ。とバカにする。

しかし、次の瞬間。吸血鬼も、それを見ていた紅音ですら、目を丸くした。まるで信じられないものを見るかのように。

吸血鬼が神坂の持つソレを見て焦って地面を踏む。勢いを殺すために地面をえぐり、雪を掻き分けて進むように地面を足掻き分け、自分の体にかかる急スピードに急ブレーキをかける。

何とか神坂が吸血鬼にかざしたソレの目の前で吸血鬼が止まった。

「へえ〜、やっぱり迷信じゃねえんだな。」

神坂は余裕たつぷりに吸血鬼を睨む。

吸血鬼は悔しげに神坂が持っている“十字架”を睨んだ。

「やっぱり吸血鬼退治には十字架ってかあ？」

神坂は悪そうな笑顔で吸血鬼に言った。

その光景を見ていた紅音ですら、何が起きたのか理解出来なかった。先程まで、神坂は“弓”を持っていた。しかし、今はどうだ。神坂は“十字架”を手にしている。神坂は十字架を取り出した仕草など見せなかった。まるで一瞬で、“弓”が“十字架”に“変化”したかのように。

「さあて、悪いコウモリの駆除開始だな」

神坂が持っていた十字架を右に大きく振る。

「ッ！？」

目の前にいた吸血鬼の腕から鮮血が舞う。

一体何が起きたのか。と神坂が持つ十字架を見た。

「なっ！？」

しかし、そこには十字架は無く、ただ鋭く銀色に輝く“剣”が握られていた。

吸血鬼が危険を察知して神坂から離れる。

「逃がすかよっ！！」

神坂が持つ“剣”が再び形を変える。

バアン！と轟音が廃工場に響く。

「銃…！？」

紅音が三度目を見開く。

吸血鬼の肩を鉛球が貫いたのだ。

紅音がソレを見て確信した。

「“錬金術”……？」

紅音が呟いた。

“錬金術”とは、有の存在をねじ曲げ、有を昇華させる力だ。世界の存在すらもねじ曲げ、神すらも介入させない奇跡の力。

代償を払い、対象を変化させる力。
間違いない。神坂 雄一の“理”は、“禁忌の理”とされる部類に
属されるのだろう。

だから神坂は理を自分達に教えたくはなかったのだろう。
神坂の生み出した槍が吸血鬼に再び血を流させた。

神坂から吸血鬼が再び距離を取る。

「禁忌の理”だと！？ふざけるなっ！！私は特別なんだ！特別な
存在なんだ！！」

吸血鬼が神坂の存在を信じたくないように必死に叫ぶ。

「ざけんじゃねえ……。」

神坂の周りの空気が変わる。

神坂の右手が強く握り締められる。

奥歯を噛み締め、

「特別な人間なんていねえ、特別な人間なんてのは、この世にはい
ねえんだ！！誰しもが平等な存在なんだよ！！！」

ヒツ、と吸血鬼の動きがビクリと止まる。

だが神坂は止まらない。

嫌だ、と吸血鬼が左右に首を振った。

自分の存在は神にも近い存在なのだ。その自分が何故、痛みを受け
なければならぬのだ。嫌だ嫌だと神坂から一步一步下がる。

しかし、神坂はなおも近づく。

神坂の槍が迫り、振り上げられ、

「ぐいああああ！！！！！」

と悲鳴を上げて吸血鬼が飛び退く。

神坂は槍の柄の部分で吸血鬼の頬を全力で殴ったのだ。

そのままゴロゴロと転がり、吸血鬼はまったく動かなくなった。紅
音はその瞬間を、吸血鬼が動かなくなるまで凝視していた。

勝ったのだ。

仇を討ったのだ。

神坂はふう、とため息をつき、紅音に近づいた。

「怖かったか…？」

と紅音の髪を優しく撫でる。

「え…？」

と紅音はきよんとする。

「いや、泣いてるから」

と神坂に指摘され、初めて自分が涙を流している事に気付く。

「あれ…？私…なんで…。」

悲しいわけじゃない。泣きたいわけじゃない。だが、涙が止まらない。とめどなく涙が溢れ出る。

「泣きたいなら泣けよ。」

神坂は優しく紅音に諭す。その優しさが、逆に紅音には響いた。

胸にあった親友の死。それを紅音はようやく実感したのだ。

「人は苦しみや、辛さは我慢出来る。けど、胸の痛みだけは、我慢出来ない。だから、今は泣けよ。」

神坂の優しい言葉に紅音が再び涙を流す。

声を上げ、神坂に抱き着き、泣きじゃくり、子どものように涙を流す紅音に、神坂は優しく優しく寄り添っていた。

長い長い夜のお話だった。

神坂の胸にすがり付き、まるで子供のように泣きじゃくる紅音に、神坂は困り果てていた。

(……こういう場合、どうしたらいいんだ?)

神坂は生まれてから今まで、女という生き物と親密な関係になった事はない。もちろんキス等もつてのほかだ。それゆえ、神坂は柄にもなく緊張していたのだ。

しかし、そんな神坂にも今は声を掛けてはならないという事くらい理解出来る。

傍から見れば、仲睦まじいカップルに見えるのだが、実際は違う。

神坂には紅音に対して恋愛感情の

「れ」すら抱いてはいなかった。

しかし、そんな仲睦まじい?二人を遮る悪魔が現れた。

ドカン!と廃工場内に爆発音に似た音が響いた。

二人が目を見開いて音の方を見遣る。

その瞬間

神坂は吹き飛ばされていた。

まるでバイクにでも吹き飛ばされたかのように体が宙に浮き、地面に激突した。

「がっ……!?!?」

神坂にも何が起きたのか分からなかった。

急に爆発音が響き、激痛と共に宙に浮き、そして地面に激突した。

「雄一!!」

紅音が叫ぶ。

その背後でユラリと立ち上がる悪魔。神坂にはソレが悪魔にしか見えなかった。

黒い翼、強靱な肉体を持つ悪魔が二人を睨み付けていたのだ。

「アンタ…吸血鬼!？」

そう、そのフォームは見間違っ事無く、先程神坂が倒した吸血鬼だ。しかし、肉体等が先程とはまるで別人である。もはや人と呼んではいけないかすらも怪しい。

吸血鬼が拳を握りしめる。

同時に紅音は嫌な予感を感じ、回避する。

「ああああ!!!」

雄叫びと共に鋼の拳が振り下ろされ、地面に大穴を開ける。裂けた地面の破片が、容赦無く紅音を襲う。

小石の一斉攻撃だ。

「ぐっ!」と悲鳴を押し殺し痛みを耐える紅音。

だが、彼女の身体は既に限界を越えていた。

血を出し過ぎたのだ。

これ以上は本当に命が危ない。

力無く地面に倒れる紅音。

「紅…音…!!」

たった一発しか食らっていないのだが、神坂の身体中は悲鳴を上げていた。体を起こそうとするだけで身体中に激痛が走り、力が抜ける。

「く……そお……!!!」

神坂の身体は確かに限界だった。だが、ここで立ち上がらなければ後悔する。と、死んでも死にきれない。と頭が叫ぶ。

指先に残る力を振り絞り、力を込める。

立ち上がったも、何も出来ないかもしれない。

でも、それでも諦めたくはなかった。

「く…くそおお!!」

守りたい。

自分の大切な人達を。

神坂はその信念だけで立ち上がった。

神坂が立ち上がるのを見て吸血鬼が飛び掛かる。霞む視界で、神坂は高速で迫る吸血鬼を向かえ撃つ。吸血鬼から蹴りが放たれ、ボロボロの神坂を捉える。

「がっ、ご……!!」

体内でパキツという音が聞こえた。同時に神坂を耐え難い痛みが襲う。

苦しい。と神坂は呟きたくなくなった。

だが、言えば進めなくなる。と神坂には分かっていた。

だから神坂は倒れずに踏み止まる。

吸血鬼が意識の無くした白目を剥き出しに再び飛び掛かる。

神坂は必死に石を広い錬金する。

錬金とは物量に沿った形で術者のイメージに合わせて錬金する。そのため、車で戦車を作る事は出来るが石では出来ない、石では出来ないが、自分よりも大きい岩なら出来る。と中々扱いが難しい強大な力なのだ。

手の平サイズの石をダガーへ錬金する。威力は無いが、手ぶらよりは全然気持ちに余裕が出来る。

振り下ろされた拳をかわし、ダガーで切り付ける。

スパッ！と筋肉が切れる音がしたが、かすり傷にしかならない。

「くっ……!!」

その程度の傷など気にしない吸血鬼の強烈な拳が再び神坂の腹部にヒットした。

「があ……!!」

と、血を吐き後ろに吹き飛ばす。

重力を無視して身体は吹き飛び、背後の壁に激突してようやく止まった。

背中に鉄の壁がぶつかり、意識が飛びかける。

しかし、強靭な精神で意識を保つ。

負けられない。

ただの喧嘩なら構わない。だが、コイツだけには負けられない。負ければ死ぬだけだからだ。

ジワリと背筋に嫌な汗が流れる。

身体中の骨が折れ、筋肉が裂け血が流れても神坂は歩く。

一步、また一步と吸血鬼に向けて。

(勝てる…勝てるから…)

と自分に言い聞かせる。

虚勢ではない。

神坂は勝つつもりなのだ。

この絶対的不利な状況でもなお、神坂は勝てると信じているのだ。もはやほぼ見えていない虚ろな瞳で、吸血鬼を懸命に睨む。

飛脚。

吸血鬼が三度地を蹴り、神坂に飛び掛かった。

これが最後のチャンス。と神坂は感じた。

これ以上は身体がもたない。

飛び掛かる吸血鬼を前に、手にしたダガーを握りしめる。

強靱な拳が三度振り下ろされ、神坂の腹部を捉える。

吹き飛ばす。

吸血鬼はそう確信していただろう。

だが神坂は“吹き飛ばさなかった”。

今にも崩れ落ちそうな身体を堪え、足を踏ん張り、地面に踏みとどまる。

ガッ！ と神坂は自分の腹にねじり込まれた吸血鬼の太い腕を掴んだ。

「へっ……………捕まえたぜ……………」

意識などない吸血鬼にすら、神坂のその笑みに恐怖を覚えさせた。

まるで勝ちを確信したかのような、勝者の笑み。

「お前の理…身体強化なんだよなあ…？」

ゾクツとする笑みを浮かべ神坂が言った。

その時、吸血鬼は弱った神坂を振り払い逃げる事もできた。だが、吸血鬼は逃げなかった。いや、何故か逃げれなかったのだ。

「グツ……！！？」

ふと吸血鬼は腕に違和感を感じた。

まるで急激に筋肉が衰えていくような、不思議な感覚。

「知ってたか？ 錬金つてのは…身体も錬金の対象になるんだぜ…？」
吸血鬼。

恐らく先程倒した吸血鬼が急に肉体が強化され、暴れ出したのは身体強化の理だけでなく、全ての理に見られる“理の暴走”だろう。理はその強化な力から、精神に多大な負荷をかけている。

その負荷が精神的ショック等により暴走し、自我を失うのだ。一度自我を失えば、破壊しつくすまでその暴走は止まらない。だからこそエリシオンがあるのだ。

エリシオンに住む住人のほとんどが“理防御”（ロジックプロテクト）を施されているため暴走する事はない。だが、今回のような“例外”も存在するのだ。

「ガア…ガ…！！！」

吸血鬼の肉体がみるみる内に通常化していく。緩やかに神坂が掴んだ腕から順番に筋肉の増築が衰退し、翼も無くなった。数分もしない内に吸血鬼は元の姿になっていた。

「…これに懲りたら、更正するこった……な…」

そこまでが神坂が覚えていた記憶の最後だった。

神坂が目を覚ますと、そこはまた見慣れない天井だった。

身体中が包帯だらけなのが圧迫感から感じ取れた。静寂の病室を見渡す。

個室、ではない。隣に誰かが寝ているらしい。

恐らく、というよりかなり高い確率でここは東条が勤める病院だろう。

「…起きた？」

「ああ」

隣のベッドから聞こえた紅音の声に答える神坂

「つて、ええ!？」

神坂は思わず飛び上がりそうになった。というか半分飛び上がっていた。

上半身を起こし隣の病人を見る。

「大きい声出さないでよ、ここ病院よ？」

と、相変わらずいつも通りな紅音にも神坂と同じくらいの量の包帯が巻かれていた。

「な、なんでお前が居るんだよ？」

神坂の答えにも冷静に答える紅音。

「東条さんの仕業でしょ、あの人この病院ではかなりの権力者だから。」

とすんなり答える紅音に神坂はずっこけかけた。

「東条さんがまさかそんなに偉い人だなんて……ただの工口医者じゃなかったんだな」

「なんか言つたかしら？」

「言つてません」

弱っている今、紅音に攻撃されれば死は免れないだろう。

「今深夜だろ？病院内で急患なんて出したら怨まるぜ？」

という苦しませの言い訳に紅音は

「それもそうね。」と大人しく引き下がった。

そんな紅音に神坂は調子を狂わせながらため息をついた。

「悲しいのは分かるから…泣きたいなら泣けよ」

と優しく言つてやる。

そんな優しさが紅音には逆に辛かった。

「…泣かないわよ、バカ」

と言う紅音に

「涙声になつてますが？」なんて聞けなかった。

「…仇は討つたんだ。それであの子が報われるとは思えないけど、

あの子はお前のそんな顔を見ていられなくてお前に声を掛けたんだと思う。」

そう、彼女はこんな紅音を見たくないから自分から声を掛けたのだ。そうに違いない。そして、仲良くなった。

「あの子のためにも、お前はそんな顔しちゃ、いけねえんじゃないか？」

彼女だつてきつと、笑つてと言うだろうから。だから、自分が側に居て笑っているのを見ていてあげたい。

「……………」

必死に声を押し殺し、布団を握りしめ、紅音は泣いた。彼女のために。彼女のために、今だけ涙を流した。

やがて二人は再び眠りに包まれた。

次に目を覚ますと、夜が開けていた。

病室に一つしかない時計を確認する。時刻は8時過ぎだ。

(学校…)

と頭に過ぎるが入院しているので無理だと諦めた。紅音は静かに寝息を立てている。まだ眠っているらしい。

「起きたかい？」

優しく聞き慣れた低い声だった。

神坂は頭を窓際に向けた。そこには白の半袖のYシャツに柄のダサイネクタイを付けた白髪の男性が立っていた。

「春雄さん……」

彼は秋元 春雄

神坂がこの街で暮らすのを見守る役を与えられたオラクルである。

神坂の理は禁忌とされるため、保護観察が付けられていたのだ。

「春雄さんが俺達を病室に？」

「ああ、重傷だったがやはり東条の腕は確かだったな。」

と皺の深い笑いを浮かべる。

「吸血鬼は？」

神坂は矢継ぎ早に質問する。秋元は暑いのかハンカチで汗を拭いながら答えた。

「バステイーユ牢獄に閉じ込めている。死人も出ているからな、どうなるかは分からない。」

バステイーユ牢獄。

エリシオンとは別の場所にある隔離された牢獄である。“理”を扱う者達には“理”を封じ込める特殊な施設が施される。でなければすぐに脱獄されてしまうのだ。そのために今までに脱獄出来た者はいない。

「そっか……」

神坂は遠くを見るような視線を流した。

自分が倒したのだ少しばかり罪悪感がある。

「しかし、今回はおふざけが過ぎたな。」

秋元が声を強めた。

「理は極力使わない、と言ったはずだ。」

禁忌の理は持っているだけで犯罪に近い扱いなのだ。身体への負担も酷い。

「へへっ……守りたくなかったですよ、こんな小さな手の平でも、何かが守れるなら……って」

神坂はそう言つて微笑んだ。

誰かが笑つたために生きてみる。それも悪くはない。そう思えるようになった。

秋元はかわらずに顔をしかめ

「雄一、お前：分かつてるのか？誰かの笑顔を守るといふ事は、自らも犠牲を強いられるといふ事だ。」

秋元は神坂に尋ねる。守るといふ覚悟を。犠牲を。

「分かつてます。でも、短い人生なんだ、出来る事はしたい。」

食い下がらない神坂に秋元は諦めたようにため息をついた。

やがて口を開き

「お前の寿命も、後3年持つか分からないのか？」

死ぬ。そう言われても神坂は変わらず

「そんなの、分からないじゃないですか。」

と神坂は笑う。

「…お前、“消える”んだぞ？誰の記憶からもお前は消える。それでもお前は人のために戦うのか？」

秋元の問いに、神坂は何かを悟つたかのように微笑み、ゆっくり頷いた。

「それまでに、たくさんの人の笑顔を守れるなら……」

それが本望だ、と。

次に目を覚ますと、時刻は3時を過ぎていた。

適度に腹が空く。この病院には昼食は無いのだろうか？と疑問になる。

「腹減つたなあ……」

と堪え難い空腹に神坂は襲われていた。

「お弁当食べる？」

起きていたらしい紅音が神坂に告げた。

「弁当？お前いつの間に？」

「さつき東条先生がさし入れだつて持つて来てくれたの。」
「抜かりはないんだな。と神坂は思う。」

東条先生の手料理だ。

食も進みそうだ。

「あ、それなら病室なんかじゃなくて庭で食べない？」

「それ、いいなあ」

紅音の提案に神坂は頷いた。

二人はまだ痛む身体を引きずりながら青く澄んだ空に生い茂る緑に
囲まれた庭に出て来た。

のどかな光景だ。

病室内とは思えないような綺麗な公園のような庭が広がっていた。

6月にもかかわず風が強い、晴れた空だった。

適当なベンチに並んで座り、さし入れの弁当を広げる。

ありきたりな中身だが、二人前の弁当はとても豪華に彩られている。

「私、お茶買って来るわね。」

そう言つて紅音は立ち上がる。

「ああ。」

神坂は頷く。

「アಂತもお茶でいいわよね？」

紅音が神坂に尋ねる。

「え？いいよ俺は」

と手を大袈裟に振る神坂。

「いいの。私が奢りたいんだから」

と紅音に満面の笑顔で言われたため、神坂は頷くしかなかった。

一人取り残された神坂は物憂げな目でのどかな庭に目をやる。

「……………3年、か。」

3年。

それが神坂に残された寿命である。命が無い。と言われた時はシヨ

ツクだった。だが、下を向いていると壊れそうになる。消えたくない、と言ってしまえば怖くなる。

こんな日常でも、楽しみたいのだ。

例え自分の存在が皆に忘れられようとも。

自分はあがいて見たかった。ここに居るんだ、と。

「お待たせ」

と陽気に手を振りながら紅音が近づいて来た。

すぐに笑顔を取り繕う。

やがて二人は食事を開始した。

久しぶりの食事は滑るように喉を通り、栄養へと変わった気がした。

東条先生のお手製と言う事もありとても美味しく感じる。

美味しそうに食べる神坂をジトツとした目で紅音が凝視していた。

その視線に居心地の悪さを感じた神坂が尋ねる。

「な、なんだよ…?」

「べつつにいゝ私の作ったお弁当でも美味しそうに食べるのかなあ

?」と嫌味つたらしく紅音が言う。

「分かん。」

「即答か!」

と神坂の首に掴み掛かる紅音。

「バ、おま、重傷なんだぞ!」

とぎゃあぎゃあとくだらないやり取りを繰り返しながら食事を済ませた。

やがて紅音が疑問に思ったのか神坂に尋ねて来た。

「そっぴや、アンタなんでこの街に来たの?」

エリシオンに来る者達は当然、理を扱える者のみだ。神坂にも何か理由があるに違いない。

「ん?ああそれはな…」

と、神坂は過去を振り返るように話し出した。

それは一ヶ月前に遡る。

その日の空はとても快晴だった。雲一つない青く澄み切った空が、神坂が住む街を覆っていた。

その日も神坂は学校へと向かっていた。いつものように妹に叩き起こされ、料理上手な母の朝食に舌鼓を打ち、いつものように学校へと向かっていた。

適当にすれ違う知り合いからお決まりの挨拶をされ、またお決まりの挨拶で返しながら自宅から10分ぐらい歩いた所にある学校へと向かう。

神坂が通う学校はそれほどレベルが高いわけでもなく、高校受験も家から近いという理由だけで選んだのだった。その高校に入学してようやく高校にも慣れてきた。今では友達もたくさんいる。

しかし、神坂には『秘密』があった。それが『理』を使えるという事だ。

自分が触れたモノをなんにでも変化させられる。この能力には幼い頃には気付いていた。

だが、両親が神坂に幼い頃から『エリシオンは危ない』と言い聞かされていたため、誰にも言えずに過ごしてきたのだ。神坂には『エリシオン』という場所にあまり良い感情は抱いていなかった。だから神坂は『エリシオン』には行きたくないと思っていたのだ。それが『理』を持っているのを言えない理由だった。

その日もいつも通りの一日だった。いつものように役に立つかも分からない学習に励み、体育で汗を流す。

そんないつも通りの日常。今日も、そんな日常のはずだった。

「神坂、弁当食おうぜ！」

そう言っただけでクラスメートの男子達が神坂の机に自分の机を寄せて来る。神坂も頷き弁当を広げて全員着席した。

「つか、お前授業中寝過ぎじゃねえ？」

「あ、それは俺も思ってたあ」

話題は神坂の授業態度についてだ。

「そうかあ？」

神坂に自覚はないのだ。ついでに悪気も。

「寝過ぎだよ、お前は」

そう言われ、神坂は今日一日の授業を思い出す。一時間目の古典の授業内容……

（確かシャーペンを握って……………ねえな）

今日一回もシャーペンを握りノートに黒板の内容を書き写した記憶が欠けていた。

「な？やっぱ勉強してねえんだよ。」

そう言われて神坂は少し反省した。

「これからは気をつけるって」

「気をつけるって、まあ俺達は別に困らないからいいけどなあ」

そう言って笑われる神坂。

こんな日常を楽しめる平和さが、この時の俺には理解出来てなかったんだ。ドラマや漫画のような体験を、まさか自分がするなどと、考えるはずもなかった

談笑しながら昼食を食べる教室内は和気あいあいとしていた。しかし、突如その平穩を破り、教師の扉が激しく開け放たれた。クラスにいた全員が何事かとそちらに目をやる。

「お前ら……逃げろ……！！」

扉を開けた張本人である血まみれの担任が、声もかすれかすれに叫んだ。

それを最後にバタツ！と血を流しながら倒れる担任。

教室内に居た女子から聞きたくないような悲鳴が上がる。

「なんだってんだよ………？」

クラスメートもかなり動揺しているのが見て取れた。廊下にいる各クラスの生徒もかなり慌てている。

神坂も何が起きたのか理解出来ず、ただ泣き崩れる女生徒を見つめるだけしかなかった。

「君達、校舎外に逃げなさい!!」

放心状態の生徒達に後から駆け付けた学年主任が叫んだ。

「な、なにがあつたんですか!？」

扉の近くにいた生徒が叫んだ。

「柿崎先生が『厄憑き』だつたんだ!!」

厄憑きとは、簡単に言えば『理』を持つ者に対する差別用語である。『エリシオン』以外に住む人には『理』を持つ人間は人間ではない悪魔のように見られているのだ。そのため、『理』を持たない人間は、『理』を持つ人間を忌み嫌い、差別する事が多々あるのだ。これが『エリシオン』という都市がある理由でもある。

「柿崎先生が!？」

学年主任から放たれた言葉に誰もが目を丸くした。

柿崎先生といえは生徒からも人気があり、授業もわかりやすいという事で有名で生徒思いな先生だ。

「厄憑きだなんて……嘘だろ……!？」

生徒達は悲鳴に近い顔で先生を取り囲み、問い詰めていた。

「昨日まで元気な『人間』だった先生がなんで……」

という悲痛な啜きが神坂に届いた。

人間。昨日までは人間。今は違うというのか？ もう人間ではないのか？

神坂の中に様々な負の感情が渦巻いては消え、神坂を苦しめた。

「もういいんだ！ 早く校舎外へ逃げるんだ！」

先生が叫ぶ。

それが引き金となったのか生徒達のはじけるように大騒ぎながら逃げ出した。我先にと出口へと群がりすぐに廊下は逃げ惑う生徒の群がりで溢れた。

気が付けば教室内には血まみれで倒れる先生と神坂だけだった。

「皆いねえや……」

と今更気付いた神坂は思い出したかのように教室から廊下に溢れた生徒の群れに自分も混じった。

しかし、これだけ慌てて生徒達が逃げ出すと、毎年していた避難訓練も全く意味はないんじゃないだろうか。

「まったく……意味ねえよなあ……」

とその階の最高尾に並んでいた神坂が何回目かのため息をついた。

「ウギイアイイイ！……！」

あまり緊張感のない神坂だったが、不意に聞こえた断末魔にも似た叫びに、だらけていた背筋が凍ってしまった。

「なっ……！！」

断末魔のような気持ち悪い声に、その場に居た生徒達は更に恐怖しあわてふためき、各階に二つしかない階段に群がる。これでは何人かの生徒が圧迫死にすらなりかねない。

「おい！ お前ら落ち着けて！！」

神坂が叫ぶ。

しかし、騒ぎ立てる生徒達の声に神坂の叫びは無情にも掻き消されてしまい全く届かない。

「くそっ……！！」

神坂が毒づく。

人間の欲深さを真近に見させられているようだった。

人間とは誰もが欲深さを持っているものだ。人の不幸を喜び、生きたいという生への執着心が溢れた時、人は醜くなるのだ。自分の格好など気にもせず、生きたいという目標へとひた走るのだ。人間が一番醜い瞬間である。

神坂が頭を抱えるのを合図に、背後でコンクリートが砕けるような爆音が校舎内に響いた。

まるで時間が止まったかのように、あれだけ騒がしかった校舎内

が水を打ったように静まり返る。

誰も動かない。いや、動けないのだ。未知の恐怖が生徒達を襲う。
「なんだってんだよ……」

神坂の背後から迫るソレに神坂もかつてない恐怖に襲われていた。一步、また一步とコチラに歩み寄るソレに、神坂達はかつてない緊張感を感じていた。頭が必死に叫ぶ。

(逃げろ……逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ逃げろ！！)
神坂が頭の中で必死に訴える。だが、動けない。誰一人。目の前に迫る『かつて』の人間に、誰もが目を逸らせなかった。

「ミツケタ……オナジ……ニオイ……」

柿崎が何かを言っていた。

(同じ……臭い?)

柿崎は確かに同じと言った。気付いている。神坂の力に。何故柿崎があんな異業に成り果てたのだろうか。

柿崎はもはや人間とは呼べない姿だった。筋肉が膨脹し、まるで岩のようにゴツゴツしている。目は真っ赤に充血し、息も荒い。そんな現象が目の前で起きているのだ。怖くないはずがない。

「オマエ……イッショ……」

柿崎の口元がグニヤリと曲がり、不気味に笑う。

それを見て止まっていた生徒達がようやく悲鳴を上げた。ホラー映画並の悲鳴だ。漫画や映画での出来事が現実起きているのだ。ある者は腰を抜かし、ある者は涙を流し、またある者は友達の手を強くにぎりしめ、我先にと階段に殺到した。もはや真後ろに柿崎は居るのだ。ジリジリと後ろから迫る柿崎に、誰もが恐怖した。

本当は、逃げるのが正解だったのかもしれない。

しかし、神坂は震える足をすっかり踏み締めて柿崎に向き合った。怖い、当たり前だ。だが……

(アイツは俺を見て見つけたって言った。)

柿崎の目は明らかにコチラに向けられていた。という事は自分に用がある意味だと理解出来る。何故柿崎が自分の事を知っていたのかは知らない。

(やるしかねえ……)

知らないが、知らないが、柿崎には一つだけ分かっていた。今、この場には自分しかいないのだ。自分しか柿崎を止められない。恐れている場合ではない。守りたい。仲間を。

(ビビッてる場合じゃねえだろ……神坂！)

そうやって自分を奮い立たせる。怖い。当たり前だ。神坂は今まで普通の生活を送って来たのだ。そんな神坂が急にアニメや映画の主人公並の強心臓を持っているわけでも、強運を持っているわけでもない。

神坂はただの高校生なのだ。

神坂が拳を握り締める。強く、震える拳を力一杯握り締める。考えて見て欲しい。自分の目の前に現実として人間ではない人間がいたとしたら。勝ち目はない、ヒーローでもないただの自分が、バカらしくならないだろうか？

だが神坂は格好を付けたい訳ではなかった。

(日本の警察なんかじゃ駄目だ。奴を止められない。ましてや待つて暇はねえ……)

日本の警察で太刀打ち出来る相手ではない。固いコンクリートすら突き破る怪物なのだ。自衛隊ぐらい必要だろう。

(だったら……やるしかねえよなあ！)

神坂は緊張等忘れて手の平を廊下にピッタリとつけた。

(出来るはず……イメージしろ……自分の理想を……)

頭の中で思い描く。神坂にしか扱えないこの力で、守るため。

次の瞬間、柿崎に無数のコンクリートの刃が襲い掛かっていた。

「グウ……！！」

怯んだ柿崎が刃をかわす。

神坂はワナワナと震える手を真摯に見つめていた。

「出来た……俺……」

いつも練習はかかさなかったからか、神坂はいつしか力を操れるようになっていた。しかし、このように対象が大きいのは初めてだった。

神坂の能力、『物質錬金』は、あらゆる物理の法則をねじ曲げ、物質の性質、形状、構成物質までをも術者の意のままに操るのだ。この『物質錬金』は、対象を選ばない。生き物だろうが、天使だろうが錬金出来る。危険な力だ。しかし、感慨に耽っている場合ではなかった。ニヤリと笑った柿崎が神坂に向けて飛び掛かって来たのだ。

「!！」

グツと体に力が入る。

動けずに居た神坂の顔に柿崎の拳が突き刺さった。グシャツという音と共に神坂の体が地面を転がり、何度も回転した。

神坂が理を扱えなければ一撃で死んでいただろう。理を扱える人間は通常の間とは細胞の強度や構成が違うのだ。普通の間とは自己治癒能力が全く違うのだ。病気への免疫力や細胞再生率が尋常ではない。骨折などは一週間もすれば治ってしまう。それは神坂も例外ではなく、細胞の強度は人知を越えている。

「痛うー!！」

しかし、痛みまではあまり和らげられない。神坂は今までの喧嘩とは段違いの痛みに体が襲われた。

しかし、神坂は立ち上がる。体が痛かったが、それでも立ち上がる。ゆっくり、力を込めて。

今までのチンピラとの喧嘩とは全く違う。勝てる気はしなかった。だが、神坂は負けたくなかった。

今思えば、俺はあの頃から守りたかったのかもしれない

負けない。神坂は負けたくないのだ。

「……へっ、効かねえな……三下……!!」

立ち上がった神坂が口元の血を拭いながら言った。

再び柿崎が飛び掛かって来る。獣のような太い腕を振りかざし、神坂に襲い掛かる。

神坂もすぐさま再び廊下に手をかざし、イメージする。

ドンッ！ という音と共に飛び掛かる柿崎の真下の廊下のコンクリートから丸く太い棒のような形に変わったコンクリートが柿崎のアゴを捉えた。

「グギッ……!？」

神坂に飛び掛かっていた柿崎は急に下から現れた障害物の一撃を浴び、綺麗に吹き飛んだ。

「っしー！！」

思わずガッツポーズをする神坂。

(いける……！！)

神坂が小さく核心する。

しかし、その期待はすぐに裏切られた。

ノソリ とまるで何事も無かったかのように柿崎が立ち上がる。そして外れたらしいアゴを入れ直し、神坂を睨む。

「な……！！」

声が出なかった。全くダメージのない柿崎の前に、神坂は微かな希望を一瞬で潰されたのだ。少しでも勝てると思った神坂の負けだった。

神坂の体が再び宙を舞う。強烈なボディブローだ。身体中の酸素が無理矢理吐き出される。そしてあつという間に神坂は教室内に吹き飛ばされた。落下地点にあった固い木製の机やら椅子やらが神坂の身体を痛め付けた。

「ぐ……があ……！！」

身体中をかつてない痛みが走る。肋が折れたかもしれない。腹部を激痛が襲う。このまま倒れていれば楽なのかもしれない。楽なのだろう。だが、

「ち……きつ……しよお……！！！！」

指先に渾身の力を込め、神坂は立ち上がる。それが自分に出来る事だから。神坂は立ち上がり、柿崎に立ち向かう。例えそれが勝算のない戦いだろうが神坂には関係無かった。勝つ。それだけだ。

ゆっくり、ゆっくりと柿崎が近づいて来た。

死ぬ。

神坂は初めて実感した。死ぬという事を。今、自分に救いはないのだと。

「オマエ……クエバ……オレハ……」

片言だったが神坂には確かに聞き取れた。「食う」ヤツは自分を何故かは知らないが食うつもりなのだ。あまり自分がおいしいとは思えないのだが。

そんな事を考えている間にも柿崎はゆっくり近づいて来る。

(死ぬ……んだな……)

神坂に、案外と恐怖は無かった。むしろ後悔の方が強かった。

守れずに、誰も守れずに……自分は死ぬのか。

そんな事を考えていた神坂の両手が急に熱くなったのを感じた。何かの内側から溢れ出すような、暖かい力。まるで身体が軽くなるような心地よい感覚。

それが、神坂の覚えている最後だった。

次に神坂が目を開けた時。

全てが終わっていた。

「……」

何が起きたのか、神坂には分からなかった。ただ、焦点の定まらない視線を泳がせ、周囲を確認する。

「どっ……なってるんだよ……？」

神坂の目には信じられない光景が広がっていた。

神坂達が通っていた校舎が、『無い』。無いのだ、神坂を中心に廃クスと化した灰色のコンクリートや木製の机等が広がっている。ふと、神坂は手に違和感を感じ自らの手を見つめ、神坂は息を飲んだ。

血に塗れ、赤々と黒光る手の平。それはまさしく自分の手だった。認めたくはないが、自分の手だった。

「え……」

声が震え、手が震え、足が震える。自分の手が真っ赤に黒光りしている。間違いなくこれは血だ。自分のではない。自分は怪我をしていない。

「なんだってんだ……」

自分は瓦礫の山の上に立っていて、辺りはもう夕闇に近づいている。自分が何をしたのか、記憶を辿っていく。

柿崎と戦い、殴られ、死を覚悟した…そして身体が暑くなり……。

「っ……！！」

神坂の記憶がフィードバックする。ガタガタと震える身体で辺りを見渡す。

「……みんな……？」

コチヲをまるで柿崎を見ていた目と同じ怯えるような目をコチヲに向けていた。

その目は、怯え、震え、軽蔑し、もはやそこにかつての神坂を見る暖かい瞳は無かった。

「おい……みんな……」

震える手で、神坂は友達に近寄る。しかし……

「ヒイツ……！！く、来るな！ 化け物！」

「っ！？」

怯えた目で、自分から逃げる友達。神坂を、かつて味わった事のない衝撃と、喪失感が襲う。

嫌だ、と思う。認めたくはない、認めたくはないが、自分は今、柿崎と同じ存在だ。

(殺される……)

神坂は、微かな意識の中でそう思った。柿崎は殺された。自分に……。

罪悪感。人を殺したという罪の意識。もう、後には戻れない。自分は異能を宿しているとバレてしまったのだから。

「う、う………」

怖い。人に嫌われたのが、死ぬという事が。もはや戻れないのだ。日常を、自らの手で壊したのだ。怖い。逃げたい。

神坂の唇がブルブルと震え、呻きが漏れた。

「うわああああああ!!!!!!」

神坂の絶望の雄叫びが、暁の空に虚しく響いた。

Logic7・ナクシタモノ（後編）

神坂が目を覚ますと、そこには真つ白な天井が広がっていた。何も分からないまま視線を動かす。横には厚いガラス張りの壁。自分はさながら観察でもされているようだった。

視線を天井に戻し、思い出す。

「あ………」

自らが犯した罪。殺人だ。柿崎がいくら人ではなかったにしろ殺人は殺人。免れないだろう。だが、自分が今いる場所は犯罪者達が呻き、飯のマズイ冷え切った牢獄ではなく、明らかに集中治療室のような、そんな場所だった。

（どう……なってるんだ……？）

まだあまり冴えない頭で必死に考える。自分は暴走し、異能を使い、殺人をした。

（なのに何故自分はここにいる？アレか？治療してからぶち込むっていう鬼が獲物を太らせるような……）

と考えているあたり自分はまだ正常なんだと気付いた。もう人間には戻れない。と決めつけていた部分があったからだ。

酸素マスクが鬱陶しく、神坂は無理矢理剥ぎ取った。息は出来る。やっぱり生きている。頬を抓る。

「痛え……」

当然の事なのだが、神坂には涙が出そうになるほど嬉しかった。生きている。人間として、今を生きている。そう、実感出来たからだ。もう死んだのだ。と意識を失う間際まで思っていた。だが神坂を同時に喪失感が襲った。

「っ……」

頭を過ぎる友達からのあの言葉。

『く、来るな！ 化け物！』

自分に向けられた恐怖。人が本当に自分を恐れた時、人はあんな顔をするんだ。と思った。あんな、自分から遠ざかりたいという涙の滲んだあんな顔を。

「くそ……くそっ……くそっ……！！！」

神坂は強く握った拳を、壁にたたき付けた。苦い喪失感と、絶望感、そして後悔。自分はなぜ守ってしまったのか？何もしなければ、こんな事にはならなかったはずだ。

なぜあの時ヒーローになろうとしたんだ。という自問自答がただ神坂の中で繰り返される。

出来る事なら戻りたい。そう思い、涙が出そうになった。

コンコン、という厚いガラスを叩く静かな音が聞こえた。

「……、」

神坂が顔を上げる。

そこにはくたびれたスーツに緩んだ趣味の悪いネクタイ、そして茶色いコートを羽織った皺の深い優しい顔をした中年男性が立っていた。

神坂が何か言う前に男性は部屋に入り、丁寧にお辞儀をした。

「……はじめまして、神坂 雄一君。私は“エリシオン” 直属治安維持部隊“オラクル” 所属の秋元 春雄だ。以後よろしく。」

“エリシオン” という単語に胸が跳ね上がる。ついに自分も“エリシオン” に、という疑念が過ぎる。だがそのまえに神坂に違う疑念が過ぎった。

(この人はわざわざ俺一人のためにエリシオンからやって来たのか……?)

おかしい。自分一人のためだけにエリシオンからわざわざ迎えに来るなんて何かがおかしい。エリシオンは異能さえあれば誰でも入れる場所だ。もし仮に自分がエリシオンに行くとしても手続きなどは向こうでやった方が手っ取り早いはず。

そこまで神坂が考えた時。男性 秋元は、ニヤリと笑い、話し出した。

「おかしいかな? 私が自ら出向いては。」

まるで心を見透かすような秋元の瞳に、神坂は吸い込まれそうになった。その様子に気付いたのか秋元は目線を神坂から外した。

「失礼。私の瞳はあまり見ない方がいい。」

秋元は自嘲気味に笑って再び話し出した。

「そうだな。何から話そうか？ 何か質問はあるかい？」

秋元の問いに、神坂は真つ先にある疑問を尋ねた。

「俺は……殺人犯……なんですよ……？」

恐る恐る、神坂は秋元の反応を確かめながら尋ねた。秋元は意味深にウーンとうなり、やがて話し出した。

「知らなかったのかな？ それとも忘れてしまったのかな？」

秋元は口調を暗くして神坂に尋ねた。しかし、神坂に思い当たる節も無く、ただ首を左右にゆっくり振った。

「うん。憲法に改正があつてな……異能者。つまり君達は“殺人”としては扱われず、“破損”として扱われる事となつた。」

秋元の言っている意味が理解出来ず、神坂は首を傾げた。

「……つまり、国が異能者の殺人を認めただよ。人ではないという位置付けをして、ね。」

秋元の言葉に神坂は言葉を失った。その言葉を理解するのに、時間が必要だった。

つまり、日本という国は異能者である者達に対する殺人の許可を与えたのだ。

「な……、」

喉がつまり声が出せない。

何故日本が憲法を改正してまで異能者達を殺す必要があるのか？

つまり、暴走さえしてしまえば誰でも殺せてしまう。それほど邪魔だと言うのか？ 自分達のような人間が。誰かに勝手に作られ、遺伝し、たまたま神が放った矢に突き刺さった自分達が、なぜ人として扱われないのか？

神坂には分からなかった。

「つまり……俺達は危ないから。だから死んでくれた方がマシ、ってか？」

納得いかない。いくはずがない。自分は自分だ。人間として今、生きている。それ以上に何があるだろう？

そして神坂はそんな自分主義な考えを許せないと思う。

「……話しを戻そうか。つまり、君は暴走者を止めた英雄。つまり表彰されるべき存在だ。だが……」

秋元はそこで言葉を切り、神坂を鋭くみつめた。

「ちと、やり過ぎだな。クラスメイトに手は出していないにしろ、君には器物破損の罪がある。その罪を表彰と引きかえにチャラにしてくれるぞうだ。」

そう言っただけ秋元は詳しく書き記してある用紙を神坂に手渡した。

手渡された用紙には堅苦しい言葉で秋元が話したのを難しくしていろいろと書いてあった。それを神坂は簡単に目を通す。

もとより表彰になど興味はないからだ。

「で、なんでわざわざエリシオンからあなたみたいなのが俺ん所に来たんすか？」

エリシオンの外など正直興味もないような連中のあつまりだとはかり思っていた神坂にとって、秋元の来訪には驚かされていた。

「そうだな。簡単に言おう……」

秋元が先程とは違う書類を取り出し、神坂のベッドにほうり投げた。

「君を向かえに来たんだ。」

嫌な予感が、的中してしまった。

「やっぱり、か……」

神坂が軽くため息をつく。

能力を持つ人間が、エリシオン外で生きていくのは難し過ぎる。しかも周りに隠していた今までは違い、今の神坂は完全アウトエー。嫌がらせめいたものを毎日受けるのは間違いないだろう。それほど人とは醜い生き物なのだ。

「わかってると思うが、君に拒否権は無い。ただYESと頷いてその書類にサインするだけだ。」

神坂が書類を手に取る。

書類は簡単な転入届けのようなもので、希望する物件等中々細かく書かなければならなかった。

「家族にはもう伝えてある。早急に手続きしてしまおう」

「ちょ！家族って！」

神坂が焦る。無理もない。あまりに急過ぎる。

「君は家族に会わない方が良い」

秋元は冷たく、冷たく言い放った。

「どういう、意味だよ……？」

「君が家族に会ったとして、仮に拒まれた時、君は立ち直る自信はあるかな？」

無情な言葉だった。

もし神坂が家族に拒まれた時、神坂には立ち直る自信も、生きていく自信も無かった。だから、神坂は言い返せずに、俯くしかなかった。

「……それに、ね」

秋元が先程までとは声のトーンを落とし、話し出した。

「君の余命は後3年なんだ……会わない方が、気が楽だ。」

「……は？」

その言葉は、神坂をどん底に突き落とすのに、充分過ぎる言葉だった。

何故今まで元気に暮らして来た自分が余命3年なのか、何故死ななければならぬのか、神坂の頭に様々な疑問が過ぎつては積み重なる。積み重なった疑問は、神坂を徐々に苦しめ、恐怖に変わる。

「なんで……だよ」

3年という制限された余命。死ぬという概念。神坂が今まで考えもしなかった事が、まさに今神坂を苦しめていた。

「なんで……なんで俺が死ななきゃなんねえんだよ!？」

自分でも生まれて初めてというぐらい、温厚な神坂が人に怒鳴りつけた。堪え難い現実を認めたくなくて。

「……君の能力、“錬金術”は、“禁忌の理”と呼ばれている一つだ。」

秋元が静かに、静かに話し出す。神坂は速まる鼓動を必死に抑え、耳を傾ける。

「“ブレイントラスト”が開発した遺伝子操作学。あらゆる人間の可能性を引き出す人工的超能力。その中には、あまりの能力の危険さに、禁忌とされた能力がいくつかある。」

「それが……俺、の?」

神坂が確かめるように尋ねた。

秋元はゆっくり頷き、話しを進める。

「君の“理”、“錬金術”はあらゆる物理、化学、生命の法則を振
曲げ、原子や細胞レベルまで変化させる。」

つまり、神坂がその気になれば家を要塞や、戦艦にすら変えられ
るのだ。お手軽ノーコスト兵器生産人間。それが、神坂の能力。

「しかし、“錬金術”にはリスクがある。」

秋元の目線がさらに厳しくなる。神坂が息を飲んだ。

「力を得るにはそれなりの代償を払わねばならない。そして君が払
う代償は“存在”だ。」

「存……存在……？」

神坂が復唱した。

存在。神坂がここに居るといふ確かな証拠。生きているといふ証。

「君の体は“錬金術”を使えば使うほど、細胞消滅のスピードを早
めてしまう。つまり、力を使えば使うほど君は早く消える。」

「っ……消える……？」

消える。という言葉に、神坂は違和感を覚えた。“死ぬ”のでは
なく、“消える”と秋元は言った。何故だ？

「不思議かい？」

そんな神坂の心を見透かしていたかのように秋元が尋ねる。顔にでも出ていたのだろうか？

「君の疑問ももつともだ。だが私は言ったはずだ。君は代償として“存在”を支払っている。と……」

「存在って……具体的に俺はどうなるんですか？」

落ち着いたので、先程とは違い、冷静な質問が出来る。

「つまり……神坂 雄一という存在が人々の記憶から消えるんだよ。家族や、友人は全員君を忘れる。一つの例外も無く、ね」

秋元はそれが自然の摂理だとも言うように、ゴミをゴミ箱に捨てるようにそれが当たり前だと言っているように神坂には見えた。それが宿命なのだ。

神坂を再び絶望と恐怖が襲う。三度その感情に押し潰されそうになる。しかし、神坂は再び違和感を感じた。

(……待てよ？ 一つの例外も無く人々の記憶から消えるなら、なんで錬金術つう能力の存在を認知出来るんだ？)

もし存在が消え、記憶から消え去るならば、能力の存在も人々は忘れてしまうのが普通ではないだろうか？

だが、秋元は錬金術を知っていた。神坂の能力の恐ろしさを、理解して話していた。それでは話しが合わないではないのか？

「秋元さん。何故、能力の事を知っているんですか？ 術者の存在すら忘れるなら、何故そんな脅威がある事を知っていたんですか？」

神坂の口調は問い詰めるかのようになっていたが、この際気にはしなかった。少しでも矛盾やおかしい箇所があるなら、もしかしたら自分は助かるかもしれない。そんな甘い考えを抱いていたのだ。しかし、現実は厳しかった。

秋元は顔色一つ変えず、話し出した。

「答えは簡単だよ、神坂君。“記憶”には残らないが、“記録”には残るんだよ」

記憶が全ての人から消え去ったとしても、記録までは消す事は出来ない。だから人々はその脅威になりうる能力を、禁忌としたのだ。記録でしか知られない能力だとしても。

秋元の言葉は、神坂の活路を再び閉ざした。

「私達だってまだ半信半疑なんだ。何しろ記録にしか残っていないからね。神話のような存在なんだよ。君の能力は」

本当にあつたのかも分からない100パーセントではないのに聞かされる疑念。誰かの悪戯かもしれないのに秋元達は信じるしかなかったのだ。それが脅威になるならば。

「そう、ですか……」

神坂が見つつけ出した活路すら閉ざされ、神坂は再び俯いた。

いきなり寿命を宣告され、はいそうですかと受け入れられる人間などそうはいない。

だが……

「そっか……俺、死んじゃうんだ」

神坂は、そう言っただけで笑った。笑ったのだ。寿命を宣告されながら、彼は笑ったのだ。命のタイムリミットが、今でも刻一刻と迫っているにもかかわらず、彼は笑った。

そんな神坂を見て、秋元は言葉が出せなかった。何故笑えるのだろうか？自分は死ぬのだ。間違いなく。しかも人々の記憶からすらも消えるという酷い死に方だ。にもかかわらず、神坂は笑った。

「何故、笑えるんだい？ 君は……消えるんだぞ？」

「消えるとか……、そういの、あんまり実感ねえし。それに……まだ俺は生きている。でしょ？」

そう言っただけで再び笑った神坂を見て、秋元は拳を握り締めた。

それがやせ我慢なのか、本音なのかは分からなかった。だが、自分は何も出来ない。してあげられない。ただ、冷たく言い放つだけしか。にもかかわらず笑った神坂を、秋元は強いと感じた。

「ふう……」

神坂はそこまで話して紅音から渡されたお茶を口に含んだ。

これが神坂がこの街、エリシオンに来るきっかけとなったお話しだ。しかし、寿命の件は伏せて話していた。何故ならば、自分がいずれ消えてしまう存在にもかかわらず他人に話す意味などない。そう神坂は判断したのだ。そして親友を亡くしたばかりの紅音に、余計な不安を与えたくないという神坂の優しさでもあった。

二人を優しい風が吹き付けた。

「そんな事があつたんだ……」

紅音は神坂の過去を悪気はなかったにしろ聞いてしまった。家族から引き離されるいう悲しみは、紅音にも分かる。だが、神坂と自分では状況が違う。

紅音はエリシオンに自らが進んで入国した。家族にも再会を約束し、やってきた。しかし、神坂は違う。神坂は家族にも会えず、連絡も取れずにエリシオンにやって来たのだ。ホームシックにもなるはずだ。

「ま、過ぎた事を後悔しても仕方ねえだろ？ 今は、前向いて生きるしかねえんだ」

たった3年の命、出来るなら悔いを残さずに消えたい。それが神坂の願望でもあった。

ついでに自分が消えるまでにくつもの人の助けになれるなら、自分の手が届く範囲で守ってやりたいとも思う。

「まあ確かに、ただでさえ陰気臭い顔なのにさらに陰気臭い顔で毎日挨拶されるよりは、今の方がマシよね」

「お前なあ……、陰気臭いとか結構傷つくぞ？ 意外にピユアハートなんだぞ？」

「だって毎日どよーんとした不幸ですー、って顔で歩いてるじゃない」

あながち否定は出来ない神坂がいた。

(否定できねえー！！ 確かにここ最近の負のオーラを全身に纏ってたからなあー……)

と、神坂はここ最近の自分を思い返して落胆した。

「だいたいあんたはねえー」

マシンガンのような口調で陽気に話す紅音を見て、神坂は強いと思った。

彼女は先日親友を亡くしたのだ。しかし、彼女はもう泣かない。陽気に自分と話している。無茶をしているようにも見えなくもないが、いや、実際無茶をしているのだろう。しかし、彼女からは何も感じられない。そんな彼女が、神坂は哀れに思えた。

だが神坂は、何も言わなかった。

いや、言えなかったのだ。

自分が今彼女に何をしてあげられるだろうか？

自分はただ、彼女を助けただけ。そんな自分が、彼女に何を言うてあげられる？

そんな自問自答が神坂の中に渦巻き、神坂のノドまで出ていた言葉を、のみこませた。

その行動が、後に彼女を苦しめるなんて、夢にも思わずに。

神坂と紅音が退院して3日が過ぎていた。

梅雨の夕暮れ、神坂はぐったりとした歩調で帰宅していた。

何故かと言われれば、明後日に迫った中間テストのせいに外ならない。

例え神坂が入院していたとしても、高等学校は甘くはない。神坂にも皆と同じようにテストを受けさせる。中学とは違い、高校は義務教育ではないからだ。

大体、何故高校は義務教育に入らないのか、と神坂はぐたらない事に思考を走らせ現実逃避しようとしていた。

そんな神坂は、足を止め、路上に立ち尽くしていた。

ある一点を見つめて。

もう夕暮れのせい、辺りに人の気配はあまり見受けられない。

そのためこの場合、見つけてしまった神坂が対処しなくてはならないのだが、神坂の第六感が告げていた。

(非常に嫌な予感がする…)

何か関われば抜け出せないような、そんな予感だ。

神坂が見つけているソレとは、倒れている小柄な少女だった。

神坂的には厄介に巻き込まれたくない。そのため、神坂は心を鬼にして携帯を取り出した。

「あ、もしもし？俺俺、」

話してはいるが電話などしていない。しているフリである。

神坂の作戦としてはこのまま電話しているフリをしてやり過ぎしてしまおうという邪道の作戦である。

一步、また一步と倒れている少女に近付く。

鼓動が早くなる。

(気付くなよ？ 気付かないでくれよー!?)

口では話しているフリをしながら、神坂は少女の横ん通り過ぎようとして、

ガシッ

足を掴まれた。

「女の子が、か弱い女の子が倒れているというのに……あなたは携帯で話すフリをしてやり過ぎました……あなた、それでも人間ですか？」

少女がギリギリと握りしめる足が痛い。

「怒って……ますよね……？」

神坂はなぜか敬語で尋ねた。

「……お腹、空いた……」

神坂の不幸の始まりだった。

「……………」

なりゆきから、いや、強制的に身分不明名称不明年齢不詳の少女を保護した神坂。

とりあえず近くのファミレスに連れていき飯を与えた。しかし、これが神坂に不幸を呼び込んでいた。

神坂は少女が腹が減ったというので飯を与えた。少女は小柄、つまり少食。

これが大きな間違いだった。

まさか、今神坂の前に居るこの小柄で細い少女が、ガツガツという表現が似合いそうな食べ方をするんだと誰が予想出来ようか。いや、できまい。

「君……よく食べるね」

神坂の問いに、少女はほうばっていた食料を飲み込み、満面の笑みで答えた。

「私のお金じゃないですから」

そうウインク付きで返された神坂は、自らの財布に居座っていた諭吉様が消える事を、予感出来てしまう自分が嫌だった。そして心の中で嘆くのだ。

(コイツの保護者見つけたらせつてえぼつたくつてやるっ!！)

と神坂は決心を固めた。やがて少女はたらふく食べてお腹がいっぱいになったらしく、腹をさすりながら呟いた。

「……デザート」

「ふざけんな」

「おごつてくれないなら大声で『止めて、誘拐犯』と叫びます」

「な!?! 可愛い顔してなんて恩知らずな! 親の顔が見てみたいっつの!」

何気なく言ってみた神坂のだが、少女は顔を曇らせ呟いた。

「親は……いません」

情に流されたというのだろうか、神坂は目の前で美味しそうにデザートを頬張る名称不明身分不明意味不明の少女を睨むしかなかった。

「このデザート美味しいー!」

と、ビッグチョコパフェを先程流しこんだメインディッシュは何処に行ったのかと疑いたくなるほど美味しそうに少女は食べていた。やがて半分ほどパフェを食べたところで少女は呟いた。

「アレ嘘ですから」

「…あ？」

「両親はいないなんて、嘘ですから」

神坂の中で何かが弾けた。

「クソガキ！」

少女につかみ掛かろうとすると、少女は冷静に『正確に』言った。

「あなたが私に手を出した場合あなたが周りのお客さんがあなたに非難の目を向ける確率100%、店員さんがオラクルを呼ぶ確率90.7パーセント、あなたがオラクルに捕まえられ、三年〜四年刑務所で暮らす確率72%、あなたが後悔する確率 100%」

すらすらと本を読むように確率を言い放った少女は悪そうにニヤリと笑い、神坂を見た。

「それでもあなたは、私を殴りますか？ 女の子への暴力は最低だと、親に習いませんでしたか？」

「くっ、くっくっくっ……」

負けた。

神坂はガツクリと肩を落とし、少女はガッツポーズで喜んだ。
ここに力の差がはっきりとさせられたのだ。

「はぁ……」

神坂は小さくため息をつく、目の前で再び美味しそうにパフェを頬張る少女を見た。そしてようやく疑問をぶつけた。

「……、お前名前は？」

「福美 知里 “フクミ チサト” よん」

長い茶色の髪を左右でくくり、小柄な体にピッタリな貧しい胸。俗に言うロリ属性だろうなあと神坂は思いながら少女を見ていた。

「歳は？」

「じゅっさん」

13という事は中学生なのだろうか。だが制服は着ていない。

「この街に居るって事は、お前も能力者なんだな？」

「そうだよ。私の理は“演算予知”」

「えんざんよちい？」

あまりに聞き慣れない名前に、神坂は首を傾げた。

「あなたも能力者なら能力には種類があるのは知ってるよね？ 自らの体を強化する“強化型”、自然の一部をまるで自分の体の一部のように扱う“自然型”、刀や槍を強化して有り得ない現象を引き起こす“武装強化型”、その強大さから禁じられた“禁忌型”、そして科学や数学等自らの知能を上げる“知能型”。他にもいくつか種類はあるけど、代表的なのはこんなもんね」

と、長い話しをしたところで知里はパフェを口に運んだ。

「へえー、そんな種類分けがあつたのかあ」

と、呟く神坂に知里は軽蔑の目線を送った。

「あんだ、ホントに高校生？」

「う、うるせえ！」

知里は激昂する神坂を放置して話しを進めた。

「私の理、“演算予知”は、“知能型”に入るのよ。分かる？」

「それぐれえ分かるわ！」

しかしなおも知里は叫ぶ神坂を無視して話しを進める。

「“演算予知”って能力は、人、物、天候、状況などから情報を読み取り計算し、予知して数字にするってわけ。つまり、私が100%と言つたらそれは覆えらない。何故なら私の計算はハズれないからね……」

最後の方は何故か暗かったが神坂は知里の理については理解出来た。

「へえー、つまり計算能力だけは世界一のスーパーコンピューターでも敵わないって事か？」

「そうなるね。私の計算はスーパーコンピューター並に早いから。」

そうねえー…あそこのお客さん、後3分以内に席を立つわ」

そう言っただけで知里は神坂達から2席ほど離れた場所に座る男性を指差した。

見るからに男性はまだ来たばかりの料理を食べており、3分以内に帰るとは思えない。

だが、

「なんなんだこれは!？」

と、突然料理を食べていた男性が叫んだ。慌てて店員が男性の元へ駆け付けた。男性は店員に料理を指差しながら激昂している。店員はひたすら頭を下げ、男性は激昂したまま足早に店を出てしまった。

その様子を神坂は口を開けて眺めていた。

「ね？」

知里がうれしそうに笑う。

「……嘘だろ？」

その後何回色々試しても知里の言う通りになった。店員が皿を落としたり、客が帰る時間を指摘したり、神坂には彼女には何かが見えているとしか思えなかった。

「私には絶えず情報が『見えて』るのよ」

「情報？」

「そつ、まるでコンピューターが正確に指摘するように弾き出された確率が常に見えている。私の頭は寝ている時以外は常に勝手に悩が休まず計算してるのよ」

つまり彼女は一日を常に計算式で休まず計算しながら暮らしているのだ。こうやって話している今も。

そんな彼女が神坂には不憫に思えた。

「毎日計算しなきゃならないなんて、しんどいだろ？」

「そう？ 慣れば誰でも出来るわよ。おかげで私は命の危険すら予知出来るから、墜落する飛行機を……予知して乗らずにも済むし、友達に嫌われているのだって分かる。あなたの…寿命すらも」

「……やっぱりか」

知里はゆっくり頷いた。

神坂の体は常に細胞分解している。つまり、彼女にとってはそれすら計算する情報になる。その進行具合から寿命すらも計算出来てしまうのだ。

「ま、バレたからどうってわけでもないしな。俺は神坂雄一。よろしくな、知里」

神坂はそう言って手を差し出した。

知里は差し出しされた手を、戸惑いながら握り返した。

その握りしめた手は、とても温かった。

温かい手を、久しぶりに握る人の温かさを噛み締めていた知里だが、次の瞬間知里は目を見開いていた。見えてしまったのだ。その演算予知能力によつて。

「っ！、雄一！ テーブルを壁に錬金して！」

知里が今一番適切な対処法を演算して叫ぶ。

神坂も知里のただならぬ様子に慌てて知里を抱き寄せてテーブルに手を当てた。

一瞬でテーブルが壁にかわり、神坂達の前に立ち塞がるのと、聞き慣れない激鉄の乱射音が聞こえるのはほぼ同時だった。

「な、なんだ!？」

神坂が映画等でしか聞いた事のないマシンガンの音にあわてふためく。

店内ではガラスの割れる音、客やアルバイトの悲鳴が響き渡る。まるで地獄絵図である。

そんな中でも知里はひたすら考えをめぐらせる。今一番適切な方法を導き出す。

神坂はそつと敵を見た。

黒いスーツの男が5人、マシンガンを乱射している。店内には流れ弾が当たり血を流している者もいる。

「ん？」

ふと神坂は気付いた、五人の中の一人がマシンガンを撃つのを止め、手をコチラに向けている。
間違いない。

「理か！」

と、神坂が叫ぶのと知里が神坂を連れて割れた窓から飛び出すのはほぼ同時だった。

次いで爆発。

理を使ったらしい。

遠くからは消防車の音が聞こえる。オラクルも来るだろう。

神坂には、何故こんな事になったのか理解出来ていなかった。

神坂はただ神坂の手を握りしめ、危機迫った顔で走る知里に連れられて走るしかなかった。

どうしてとか、なんでなどの疑問が浮かんではいた。だが、神坂は一つだけ分かった。

（この子、命を狙われて…るのか？）

だから傷つき、路上に倒れていた。

（追われているんなら、いつから？ 一人で？）

神坂は自分が恥ずかしくなった。何故、自分はその時見捨てようとしたのだろうか？自分はたくさんの人を笑わせる、と決めたでは

ないか。自分が守れる命なら守る。と決めたではないか。

「くそっ……!!」

神坂は知里の手を引き路地に入った。

知里からすれば安全な演算を頭の中で割り出し、逃げていたのだから神坂が路地に入ったのはあまり得策とは思えなかった。

「雄一、あなたバカなの!? 私の言う通り逃げれば間違いなく逃げ切れる!」

「バカ野郎……」

「え?」

「バカ野郎って言うてんだ!」

知里の手を取りながら裏路地を走る神坂は、力強く叫んだ。

「なんで俺に助けてって言わねえんだよ! 逃げるだけじゃ、いずれ捕まるだけじゃねえか!」

「しかし、今の追っ手を倒してもまた新たな追っ手が現れるだけ」

たしかにそうかもしれない。何度でも知里を追い掛けるかもしれない。だが、

「俺が、おまえを守ってやる」

「…え？」

そんな温かい言葉をかけられたのは、久しぶりだった。自分はいつもお荷物で、論理的で。

そんな自分が居たところで邪魔にしかならない。

「私には戦闘はできないんだよ？　ただ見守るしかできないんだよ？」

知里は必死に自らの無力さを神坂に訴える。

しかし、いくら知里が何を言おうが、神坂は気にもしない。神坂雄一とはそういう人間だ。

「守るって言うてんだ、おまえはそこで守られてる」

神坂が走るのを止めて振り返り、追っ手に向き合った。

知里が割り出した神坂の戦闘勝利率は76%。勝利は間違いない。間違いないのだが、不安になるのはなぜだろう。

追っ手が迫る。

「あまりてこずらせるなよな」

黒いスーツの男が5人。神坂に向けて歩いて来る。

「渡してもらおうか？　生きたスーパーコンピューターをな」

ギリツと歯がきしむ。

「生きたスーパーコンピューター？」

低い声。雷の前の静けさ。自分のものだ。

「知里は、人間だ！」

次の瞬間、神坂は飛び出していた。

一番近くにいた男のマシガンを掴み、錬成。

あっという間にマシンガンはサーベルへと錬金される。

「なっ！？ なんの能力だ！？」

男達がざわめいた。

しかし神坂は止まらない。奪い取ったサーベルを手に、男達に切り掛かる。

「くそっ！ このガキ！」

男が神坂に手をかざした。間違いない。理だ。

神坂はすかさず地面に触れる。

「錬、金！」

男の真下の床が崩れ落ちる。

「なっ！？」

バランスを崩した男は理を壁に向けて放ってしまった。

路地裏の狭い壁が、崩れ落ちて男に降り注いだ。

耳に嫌な声が聞こえたが、神坂は気にせず次のターゲットにサー

ベルのみねでなぐりつけた。

それが最後の一人だった。

戦闘を終えた神坂はフウとため息をつき、手にしていたサーベルを石に変えてから投げ捨てた。

もし誰かがサーベルを拾えばあらぬ事故や疑いをかけないとも限らない。

「俺の強さ、分かっただろ？」

そう言っただけ神坂は知里の頭を優しく撫でた。

知里は恥ずかしげにはにかみながら言った、

「ザコをいくら倒して強いと言われても納得しかねるわね。大体戦いの方法も12ヶ所ぐらい無駄があった。もう少し安心出来る戦い方をしてよね」

「くっ、このガキヤ……」

と、みしみしと沸き上がる殺意を必死に押さえ付ける神坂。

そんなことはつゆしらず、知里は笑顔で付けたした。

「ま、82点ですね」

その笑顔を見せられて、神坂の中の怒りは消えた。

「ま、私を守るにすれば弱いボディーガードですけど」

最後の一言が余計だった。

「このガキイ！！！」

神坂の怒声と知里の悲鳴だけが夕闇の街に響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4753g/>

あらゆる禁忌の理

2010年10月9日02時06分発行